



特別史跡  
一乗谷朝倉氏遺跡 XX

昭和63年度  
発掘調査  
整備事業概報

福井県立朝倉氏遺跡資料館

## はじめに

一乗谷の山が狭まるところ、北の入口に下城戸を、そこから1.8km谷奥に上城戸を構築し城下町の主要部を区画するとともに、出入口としていました。下城戸に関しては、すでに内側を発掘調査し、保存整備工事も行っています。上城戸も復原整備いたすべく、本年度発掘調査を実施した次第です。

城戸口を明確にすることはできませんでしたが、本来の土塁の規模や構築方法を知ることができました。また土塁の内側には土塁に平行して道路があり、それに面して小規模な屋敷が並んでいたことも分かりました。土塁の南面に沿って外濠跡があり、トレンチ調査で深さなどを調べました。濠の南肩は指定地外の田んぼに含まれますので、所有者のご協力をいただき、発掘調査し幅を確認しました。

高さ5mの土塁上にはさらに塀などがあり、長さ105mも続いていたと推察されます。また前面には幅12m、深さ3mの濠が掘られており、上城戸は城下の町並の正面にふさわしく、堂々たる偉容であったにちがひありません。外濠からは朝倉氏の家臣と思われる名前が墨書された木簡など貴重な遺物も出土しました。

環境整備は、城戸ノ内中央の西側の吉野本地係で行いました。寺院や武家屋敷、町屋などの跡が数多く検出された、赤渕地係から奥間野、吉野本地係に広がるこの地区の発掘調査や環境整備は、本年度で一応終了することになります。

整備方法はこれまでと同じような平面的整備ですが、山裾の石垣などを復原補修することによって立体的な変化を与えることができたのではないかと思います。遺構は全体的には平面的ですが、計画的に配置された幅広い街路、整然と並ぶ大小の屋敷跡などから、戦国時代の大規模な賑いのある町並の様子をしのぶことができるのではないのでしょうか。

おわりになりましたが、事業の実施にあたり、種々ご指導、ご援助をいただきました文化庁、朝倉氏遺跡調査研究協議会、福井市教育委員会などの関係各位、ならびに城戸ノ内町をはじめとする地域の皆様に心から感謝申し上げる次第です。

平成元年 3月

朝倉氏遺跡資料館長 藤原 武二

# 目 次

## はじめに 目 次

第61・62次調査	発掘された遺構 …………… (岩田 隆) 1～3
	発掘された遺物 …………… (月輪 泰) 4～9
	上城戸に関する文献・上城戸 …… (佐藤 圭) 10～11
	出土の木簡の内容
第63次調査	…………… (南洋一郎) 12
環境整備	第51・52次調査地区整備工 …… (吉岡泰英) 13～15
	新御殿修景工 …………… (吉岡泰英) 15

プレート (写真)	P L. 1 上城戸・第51・52次調査整備
	P L. 2～10 第61・62次調査 (上城戸) 遺構
	P L. 11～20 第61・62次調査 (上城戸) 遺物
	P L. 21 第63次調査
	P L. 22～28 第51・52次調査区整備工
	P L. 28 新御殿修景工

図 版	第 1 図 発掘調査・環境整備位置図 (折込)
	第 2 図 第61・62次調査遺構全測図 (折込)
	第 3 図 第61・62次調査遺構
	第 4 図 第61・62次調査遺構立面図
	第 5 図 第61・62次調査土層図 (折込)
	第 6～13図 第61・62次調査遺物
	第 14 図 第51・52次調査区整備工全体図 (折込)
	第15～16図 第51・52次調査区整備工・詳細図
	第 16 図 第51・52次調査区整備工・石垣立面図
	第 17 図 新御殿修景工全体図

## 第61・62次発掘調査（上城戸跡）

昭和61年度に城戸ノ内の北の入口である下城戸の発掘調査を終えたのを受けて、本年度は南の入口である上城戸の発掘調査を行った。調査の主眼は、城戸口の発見とその構造を下城戸のそれと比較検討することに置いた。上城戸は下城戸より2km南の一乗谷が最も狭くなったところに位置し、東の山麓には上城戸の守りのため堀切と二段の郭から成る櫓跡が存在する。

発掘調査は、福井市新東町字上城戸地係・城戸ノ内町字上城戸地係の約4,000㎡について、昭和63年4月17日から63年12月21日まで実施した。

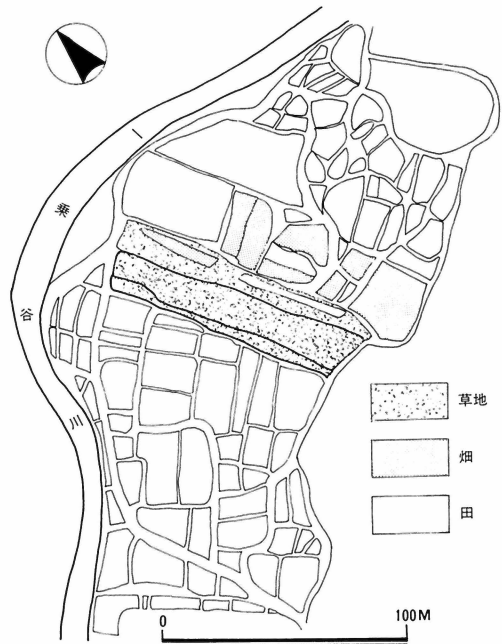
近辺の調査については、昭和58年上城戸の200m南東新町字齋藤地係において一乗小学校のプール建設に伴う発掘調査を行い濠に囲まれた館跡を検出した。また、一乗谷川の対岸になるが、昭和50年と61年の両年西新町字心月寺所在の一乗小学校の校舎改築に伴う発掘調査を行い道路跡と町屋跡を検出した。

### 発掘された遺構（P.L. 2～10、第1～5図）

上城戸の発掘前の状態は、土塁の東半分は削平されていたが西半分約50m分が残っており、濠についても川よりの約20mが2m近く深くなっていた。ただ、周辺の地形は、昭和46年に圃場整備が行われたためすっかり変わっている。挿図1は明治9年の地籍図であるが圃場整備前の周辺地形図とあまり変化がない。発掘調査では、土塁、濠が100mにわたって検出され、土塁の北側裾には砂利敷の道路が走り、道路に沿って石積施設、井戸が並び、小区画の屋敷跡の存在が推定された。

**土塁 S A 3631** 東側の山麓から北西の方向にほぼ直線的に105m伸び一乗谷川に達する。幅は基底部で16mを計るが、上端部は、削平と風化で最大で3mしかない。西端の幅は、石列 S X 3668・3667などから北に扇状に広がり約22mあったと推定される。高さは、北側道路面から6m、南側の濠の対岸からは4m、濠の底からは7.5mある。土塁の勾配は、外側、内側とも45°前後で後の軍学書にいう「矩勾配」になっている。

土塁の西端は石垣 S V 3651が築かれている。



挿図1 上城戸周辺地籍図

石垣は、かなり傷んでおり南半分と上半分を欠き、残存する石垣も大きく迫り出している。確認できる高さは2.5mであるが、築造当初は土塁の上端まであったと考えられる。1.7m×1.1m程の巨石も使用しているが、下城戸の石垣より小振りである。土塁前面にも石垣S V 3657・3658が積まれている。しかし、濠の中に崩落している石の量からして全面に石垣が積まれていたとは考えられない。土塁盛土部分の下<sub>レ</sub>が石垣となっていたのではないだろうか。また、石垣といっても裏込めがほとんどなく、表面の1石分を葺石風に積み上げただけである。土塁の内側東寄りの一部にも、小振りの石を垂直に積み上げた石垣S V 3659になっている。

土塁の内側西よりで土塁に昇降するための坂らしき跡が見つかった。石垣S V 3655・3656に挟まれたところがそれである。幅が1.5m、現存長は3m、勾配は約30°である。

土塁の構築方法については、土塁を横断するトレンチを2本入れて調査した結果、土塁基部にあたる茶褐色層の上面はほぼ平らで、その上に砂利や砂質土が3～4層、高さ1.4～1.6m、幅5.5～7.5mにわたって盛られ、土塁内寄りでは基部から山土を盛り上げていた。このことからまず土塁を築くための基部を平坦にし、濠を掘ってその土を盛り上げ、東の山裾を削って土を運び盛り上げたと推定される。土塁を築くにあたっては一層一層の土層が厚く、版築のような技法は用いていない。また、100mにわたって一度に築き上げることは困難なので、5～10mのブロック単位に盛り土している。それはS X 3669～3674にみられる土塁を横断する一連の石垣から判断された。石垣S V 3652～3654も縦方向ではあるがそうした石垣の可能性もある。この築造法は、下城戸でも見られた。

土塁中央付近の北側の裾部から道路面にかけて厚さ10cm程の焼土層がみられ、「朝倉始末記」の記載から桂田長俊滅亡時の焼土と推定される。焼土の厚さから土塁の上には土壁を持ったある程度の建造物が存在していたと推定される。

**溝S D 3637** 土塁の東半分の内側裾の石組溝である。土塁側の溝石は一部を除いて存在しない。この溝は、土塁中央部で道路を斜めに横切っている。一義的には土塁斜面の水を排水する機能を有すると考えられるが、土塁西半分にはこの溝がなくかわりに裾石S X 3675～3677が断続的に存在する。

**濠S D 3634** 東端は山裾に達し西端は一乗谷川につながる。現存する長さは土塁と同じ105m、幅は対岸の田にトレンチを入れさせてもらって確認したところ約12mあり、深さは田の面から3mある。底は平坦で箱堀である。濠から出土した遺物は非常に少なく、西端のトレンチから墨書木製品が出土したのが目立つ程度である。濠の埋まり方については、一乗谷滅亡後のかなり早い時期に1.5m程埋まり、その状態が長く続いたらしく直径30cmを越す杉の切株が多数存在した。

**道路S S 3650** 土塁の北裾にある砂利敷の道路で、80m分が検出された。幅は西よりで4m、東に向かって少しずつ狭くなり、S D 3638付近では幅1.5mしかない。S D 3638から東は幅2m

に広がり3%の勾配をもって上っていくが東端は不明。道路面は2～3回、合わせて15～20cm程度の嵩上げが認められる。

**暗渠 S Z 3662～3666** 道路の東半分には道路を斜めに横切る暗渠が5本ある。溝石は1段のみで使用されている石も小さく、溝幅も15cm内外と狭い。S D 3636からS D 3638までに存在する3本の暗渠は、ほぼ6m間隔にある。S Z 3665は、井戸S E 3643からの排水路であるところから、他の暗渠もそうした可能性が強い。

**障壁 S A 3622** 道路S S 3650と北側の屋敷群とを隔てる土塀の基礎と考えられる。幅は約1.2mで、断続的ではあるが約28m確認できた。土塀の基礎の北側石列は水田の段になっていたため遺存状況が悪い。なお、S X 3681は障壁の続きのように見えるが、石列の面の向きが異なっており別の遺構である。

**石積施設 S F 3644～3647** 北側の屋敷の溜耕で北の面がすべて壊されているが、1.5m×1.2m、深さ0.7m程である。S F 3644は、S F 3645の西壁を壊して造りなおしており、S F 3647を除いて障壁3622の下層にある。

**石積施設 S F 3648・3649** 道路S S 3650の中央付近北にある石積み施設で2基平行に並んでいる。S F 3648は長辺が2mとやや大きく平面形が逆L字状になる。

**井戸 S E 3642** 石積み施設S F 3648の東にある石積の井戸で、直径60cmと小さくて底まで掘れなかった。

**井戸 S E 3643** 道路の東端近くで見つかった。この井戸も直径60cmと小さく、周辺に石敷があり、洗い場と思われる。ここからの排水は暗渠S Z 3665を通過して溝S D 3637に流れ出る。

**東山裾トレンチ** 上城戸の東一段高くなった平坦部は、山裾を城戸口と想定すると何等かの防御施設が予想されるため、東西方向に幅3mのトレンチを入れた。上層は削平されたらしく遺構は検出されなかった。下層から建物の礎石らしき石と円形の溜桝（S X 3688, 89）らしき遺構が見つかっただけである。

**北東部のトレンチ** 東山裾の一段高くなった平坦部の北の端にあたる石垣S V 3661とその下の溝S D 3641を検出した。

今回の主眼とした城戸口は発見できなかった。川側については、土塁の端を石垣で築いているが、石垣が一乗谷川に対する護岸とも考えられることや、後世の護岸工事のため石垣の基部が調査できなかったことから城戸口との確証は得られなかった。東の山裾は土塁がすっかり削平され地山が表れていたことから確認できなかった。しかし、土塁を入ったすぐの地区が小区画の屋敷群と推定され、下城戸のすぐ内側が町屋群であったことから上城戸の小区画群も町屋の可能性もあり興味深い。

濠から出土した木簡「たくみ殿まいる 宇佐」は、「朝倉始末記 義秋將軍朝倉屋形江御成次第」の記述と併せて、上城戸のすぐ外に詫美の屋敷跡があったことを推定させる。

発掘された遺物（P L. 11～20、第6～13図）

上城戸の調査は、面積等の都合により61・62の二次に分けて実施したが、今回の報告では、二次分の遺物を上城戸の遺物として纏めて扱うことにする。また遺物の大部分は、城戸の土塁S A 3631を挟んで南側の濠S D 3634と、北側の平地という性格を異にする区画から出土しているため、これを分けて扱うことにした。出土遺物は、総点数20,275を数える。内訳は、表1に示した通りである。概観すると、土師質土器の全体に占める割合が75%と高く、越前焼が14%余りとこれに次ぐ。残りは瀬戸・美濃焼等日本製陶器、青磁・白磁・染付等輸入陶磁器、金属、

表1 上城戸遺物一覧表

器種	区画	濠		土塁以北		合計		器種	区画	濠		土塁以北		合計	
		片数	%	片数	%	片数	%			片数	%	片数	%	片数	%
越前焼	甗	58		1,440		1,498		中国製陶磁器	染付	碗	8	43	51		
	壺	52		458		510			皿	14	148	162			
	鉢	6		100		106			坏	0	4	4			
	鉢	71		724		795			他	0	3	3			
	火桶	1		4		5			計	22	0.74	198	1.14	220	1.09
他	0		1		1			計	63	2.12	613	3.54	676	3.34	
計		188	6.35	2,727	15.7	2,915	14.4	朝鮮製陶磁器	碗	0	3	3			
日本製陶器	瀬戸	碗	23		81		104		壺	2	15	17			
		皿	2		15		17		他	3	3	6			
		鉢	1		1		2		交趾三彩	5	0.16	21	0.12	26	0.13
		壺	9		16		25		交趾三彩	0		1		1	
		香炉	0		1		1		近世陶磁器・他	8	0.27	126	0.72	134	0.66
	水注	0		3		3		陶磁器計	2,781	93.9	16,540	95.5	19,321	95.3	
	茶入	0		1		1		銅	18		36		54		
	他	2		6		8		釘	5		243		248		
	計	37	1.25	124	0.71	161	0.79	錐	1		0		1		
	美濃	碗	7		24		31		カスカイ	1		0		1	
皿		20		94		114		刃	0		3		3		
香炉		1		2		3		他	1		21		22		
卸皿		3		0		3		計	26	0.87	303	1.74	329	1.62	
他		0		2		2		バンドコ	3		187		190		
計	31	1.04	124	0.71	155	0.76	盤	2		56		58			
瀬戸	瀬戸壺	0		2	0.01	2	0.01	硯	0		18		18		
	計	68	2.29	250	1.44	318	1.56	白・茶	0		17		17		
	皿	2,439		12,727		15,166		紙	2		12		14		
	土鈴	1		4		5		風	0		9		9		
	土釜	4		44		48		玉	0		7		7		
壺	1		0		1		コ	0		2		2			
他	0		1		1		マ	0		6		6			
計	2,445	82.6	12,776	73.7	15,221	75.1	鉢	10		142		152			
土師質	香炉	1		7		8		計	17	0.57	456	2.63	473	2.33	
	鉢	2		3		5		木	掃	1		0		1	
	風	0		1		1		漆	22		0		22		
	仏	0		2		2		碗	2		0		2		
	他	0		5		5		皿	4		0		4		
計	3	0.10	18	0.10	21	0.10	曲	8		0		8			
信濃	壺	0		5	0.02	5	0.02	コ	1		0		1		
	他	1	0.03	3	0.01	4	0.02	柿	2		0		2		
	計	2,705	91.3	15,779	91.1	18,484	91.2	墨書木製品	4		0		4		
	碗	13		101		114		建築部材	13		0		13		
	壺	0		4		4		他	63		6		69		
青磁	鉢	1		3		4		計	120	4.05	6	0.03	126	0.62	
	鉢	0		2		2		骨	2		1		3		
	香炉	0		3		3		壁	0		7		7		
	他	0		9		9		種	4		0		4		
	計	16	0.54	180	1.03	196	0.97	具	2		0		2		
白磁	碗	0		3		3		他	8		2		10		
	皿	24		213		237		計	16	0.54	10	0.05	26	0.13	
	坏	1		14		15		合計	2,960	100.0	17,315	100.0	20,275	100.0	
	他	0		5		5									
	計	25	0.84	235	1.35	260	1.28								

石製品、木製品等である。濠を調査しているの  
で木製品がやや多いが、全体的傾向は、これまでの調査地で得られた結果と大きくは異ならない。

今回調査を実施した上城戸に対し、もう一方の防禦施設である下城戸は、既に第56次調査が行われ、遺物に關しても概略が報告されている。下城戸における遺物の状況を概観すると、土師質皿が76.4%と多く、それに次ぐ越前焼は11.5

%と非常に少ないという傾向が見られ、上城戸と類似している。下城戸の遺物量が5500と少ないのは調査面積や遺跡の保存状態の差等によると思える。

### S D 3634 出土遺物

S D 3634から出土した遺物は2960点を数える。遺物の出土状況を観察すると、東端トレンチでは約50点、中央のトレンチでは約150点しか出土していないのに対し、西端トレンチでは残りの大半が出土している。このことから、濠には緩やかながらも水流があったことが窺える。西端トレンチは、土層の堆積状況から一乗谷川の水流の一部が流れ込み、濠の水との境にできた淀みの部分と考えられ、川の運んだ遺物と濠に廃棄された遺物が混ざって埋没したのであろう。遺物の内訳を概観すると、土師質皿が特に多く約82.4%を占める。また予想されていたとおり、濠の底付近の層から遺存状況の良好な木製品が多数出土し、4%余りの比較的高い割合を示している。その他は全体に低い数値を示しているが、特に越前焼が少ないのが目を引く。遺物は、土師質皿や木製品の一部を除いて越前焼など細片が多く、また量的にも少ないことから、既に破損したものが上流の屋敷から排出したものと思える。土師質皿に完形品がみられるのは、使い捨てなど、その用途と関係あるのかも知れない。

**越前焼** 甕・壺・播鉢等が出土したが、量は非常に少ない。(1)は、口縁が内湾する鉢で、口径約14.8cmを測る。(4)はⅢ群<sup>①</sup>b、(2・3)はⅣ群の播鉢である。

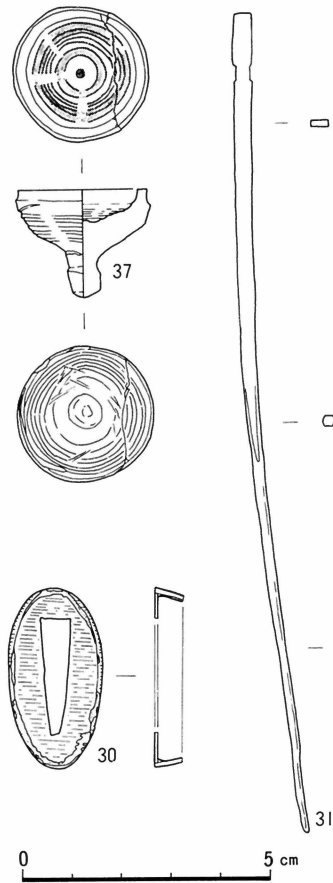
**瀬戸・美濃焼** 鉄釉は碗が多く、灰釉は皿が多い。(9)は黄瀬戸皿である。口径約11.5cmを測る。畳付きから直線的に開いた胴は、口縁部で外反する。腰部は露胎であるが、釉或は鉄分の流下が見られる。底部は、内側を削り、高台をつくる。高台内にも釉が施されている。(10)は鉄釉の壺である。破片であるため全容は不明だが、肩部に耳が付く。灰釉碗(12)は、スタンプで蓮弁を描いている。(13)は、口縁が外反する皿である。口径約11.4cmを測る。見込には印花が見られる。(14)は、底部を浅く削り込んだ碁笥底の皿である。口縁は緩く外反する。

**土師質土器** 皿がほとんどである。概観すると(17~19)等C類<sup>②</sup>が大半を占め、(16)等のB類、(20)等のD類がこれに混じる。

**瓦質土器** わずかに3点が出土した。香炉(21)はそのうちの1点である。口径約10.6cmを測る。遺存部分には認められないが、脚が付くはずである。

**中国製陶磁器** 63点を数える。青磁は碗が多く、染付は皿が多い。白磁は、皿がほとんどで、碗は含まれない。(22)は、粗い調子の線描蓮弁文を施す青磁碗である。口径は、約12.8cmを測る。(23)は、腰部が大きく張る青磁碗の底部である。見込みには一重圏のなかに印花がある。高台内は釉が拭き取られている。底部だけを残すよう、意図的に体部を打ち欠いたものと思える。(24)は、青白磁、腰折れタイプの皿である。高台は、貼付け高台である。釉は、全体に掛かるが、高台畳付以内は露胎である。白磁環(25)は、口径約6.8cmを測る。割れ目には補修痕が残る。(27)は、いわゆる「饅頭心」<sup>③</sup>の染付碗E群である。見込には界線のなかに人物を描き、





挿図2 S D 3634出土遺物

高台内には二重界線のなかに「長命富貴」が書かれる。高台外側にも界線が二本引かれる。壘付のみ露胎である。(28)は、外面に唐草文、内面にアラベスクが描かれる。B群Ⅶに分類される端反りの皿である。

**金属製品** 銅銭が18枚出土したが、内12枚は中央トレンチから比較的まとまって出土した。内訳は、永楽通寶10枚、大観通寶2枚である。(30)は、銅製鋸である。長径約3.6cm、短径約1.9cm、重さ約5.6gを測る。約5mm幅の帯状の材を楕円形に整え頂部で接合し、面となる銅板をはめ込んで作る。(31)は、銅製の箸である。長さ約16.5cm、重さ5.5gを測る。頭部は断面長方形に作るが、中央から先端にかけて円形にする。頭部には両側面からの挟りがある。

**木製品** 総点数120を数える。建築部材等一括扱いとしたものもあるので、本来の個体数は更に増す。(32)は付け札である。長さ約21.3cm、幅約4.3cm、厚さ約0.4cmを測る。上部・中央・下部に3対6箇所、約1～2mmの切込が施されている。上・下部の切込は裏面に貫通するが、中央は貫通せず、表面から斜めに削り出している。墨書は「たくみ殿まいる 宇左」と記され、墨自体の遺存状況も良好である。(33)は「貳丁たちまち」の墨書がある板状木製品である。下部を欠く。遺存する長さ約11.9cm、幅約2.5cm、厚さ約0.4cmを測る。上部裏面の長辺と、短辺の中央に各々1箇所切込がある。裏面の下部が約1.3cm幅の帯状に変色しており、付着物の痕跡と思える。墨書は、ほとんど墨が残らず、辛うじて墨書部分の木質が浮き出ている。(34・35)は、柎経である。幅約2cm程の薄い剥板に経文が墨書されている。内容をみると、(34)が「有至心願生彼国雖不大修功」とあり、(35)が「轉相拯濟精求願」とあるので「無量寿経」下巻の部分であることがわかる。(36)は折敷の裏面に墨書のある例である。折敷は一辺約17.6cm、厚さ約0.4cmを測る。墨書は墨の薄い部分もあるが「ひつなへにや」とも読める。(37)は独楽である。内面に朱で円が描かれている。本遺跡で独楽の出土した初例である。漆碗は、22点が出土した。(38・41)は、黒漆の内外面に朱漆で蓬萊文を描く。口径は15cm程度におさまる。(39・40)は、黒漆の内外面に朱漆で開扇文が描かれる。口径は14cm程度である。(45)は、用途不明の加工木である。丸く整形した頭部約2cmを残して半裁し、先端を尖らせている。裏面には虫喰いがある。(44)も加工木である。棒材を縦方向に丁寧に削る。(48)は竹の加工品で

ある。径約6.6cm、高さ約6.4cmを測る。節の部分で底部としていたようである。表面は縦方向に削り、口縁端部は面取りする。この他雪下駄(42)、梳櫛(43)、曲物底部(46)、折敷脚(47)等が出土した。

### S A 3631以北の出土遺物

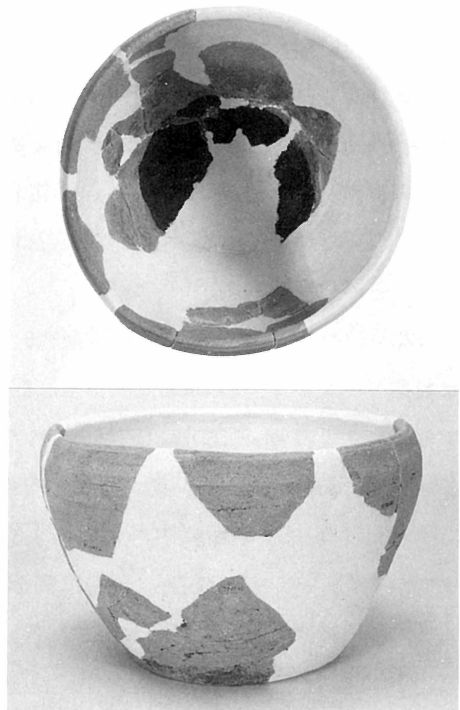
S A 3631の北側は、S S 3650を挟んで溜櫛・井戸を伴う屋敷があり、生活遺物が出土した。

**越前焼** III群 a の甕(49)、IV群 c の(50)等が出土した。(50)は肩に「本」と格子目のスタンプが巡り、へら記号が刻まれる。壺(52)は、肩部に粘土紐を貼付け、その上位にへら記号がある。小壺(54)は、自然釉の掛かる肩に「H」字のへら記号がある。内面には、鉄錆が付着していた。(55)は挿鉢形、(56)は口縁が内湾する鉢で、ともに外面底部にへら記号がある。口縁が内湾する鉢は、口縁を内傾して切る小型の例が多いが、(57)は、最大径約30cmと大型で、口縁も水平に作る。(58)も大型の例であるが口縁は内傾して切る。口径約27cm、高さ約18.5cmを測る。内面底部に砂鉄状の異物が厚さ約1.5cm程沈澱した形で付着する。挿鉢は(60～66)等、口縁直下に段或は沈線を巡らすIV群が主体である。(63)は、片口が付く小型の例である。外面底部にへら記号がある。(59)は、III群 b の例である。口縁内側のやや下がった部位に、沈線が巡る。

**瀬戸・美濃焼** 黄瀬戸碗(67)は体部が直線的に大きく開く碗である。腰部にはサビ釉を施す。

(68)は、口縁部の屈曲が強い黄瀬戸天目茶碗である。鉄釉碗は、小型の(69)、口縁下の屈曲の弱い(70)、屈曲の強い(71・72)等がある。鉄釉皿(73)は、体部が豊付から外反するタイプで、底部内側を削り高台を作る。全体に施釉され、見込に目跡、高台内に輪トチ跡がある。(74)は、内湾するタイプである。底部内側を削って高台を作る。全面に施釉され、見込に目跡、豊付に輪トチ跡がある。(75)は口径約6cmを測る小型の香炉で、脚を貼付ける。鉄釉では他に水滴(76・77)等も出土した。灰釉皿は、(79～81)等、胴が丸く口縁が外反するタイプが多い。(78)は、腰折れで口縁が外反するタイプである。腰部以下は露胎で、高台内に「井」字の墨書がある。(82)は、灰釉の香炉である。腰部以下が出土した。腰部の径は、約12cmを測る。底部には回転糸切痕がある。腰部下位に、形骸化した脚を貼り付ける。

**土師質土器** 皿は(87～90)等のC類が多く、(91・



挿図3 越前焼 深鉢

92)等D類が混じる。(85・86)等の丸皿は少ない。(84)は、箸置きに用いる耳皿である。長径約5.8cmを測る。土釜(93)は、へら記号がある例である。鏝以下にススが付着する。

**瓦質土器** (94・95)等香炉が出土している。(96)は花瓶である。口頸部は朝顔状に開き筒形の短い胴をもつ。脚を欠く。胴には雷文と蕨手文が巡る。

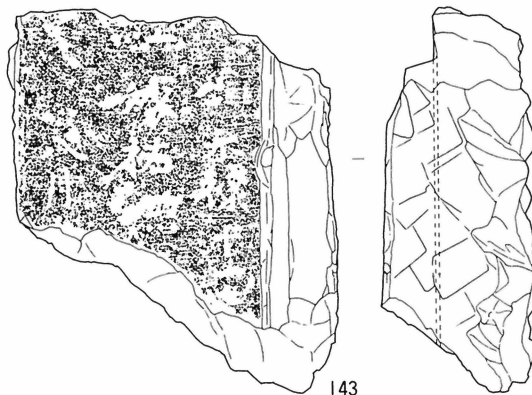
**中国製陶磁器** 青磁は碗が多い。碗(97)は、見込に印花、外面に線描蓮弁文を施す。高台内は中央を残して釉を拭き取る。(98)は、外面に略式の蓮弁を、見込に花文をへら描きする。釉の拭き取られた高台内に「八」字の墨書がある。(99)は、小さな高台から体部が大きく開く鑄蓮弁碗である。(100)はへら描きの弱い蓮弁をもつ小碗である。皿(101)は、菊皿風につくる。(102)は、口縁が折縁になり、外面の蓮弁はへらで削り出す。(103)は稜花皿で、二次的に火を受けているため釉は荒れている。香炉(105)は青白磁釉が掛かる。底部をほぼ平坦に作る。(106)は花瓶の胴部である。四方に竹節状の凸帯を貼る。この他、瓶の頸部(107)等が出土した。白磁は皿が多い。皿は、(108～110)等、端反りの口縁で広い見込をもつC群の例が主体である。(111)は、高台径が比較的小さく、底部を厚く作る皿である。見込は、中央を残して釉を掻き取る。(112)は、内面に型による唐草文が施されている。坏は、腰が張る(114・115)等が出土した。見込は、中央を残して釉が拭き取られる。染付も皿が多い。(116)は、口縁外面に波濤文を描くD群の碗である。(117)は、口縁外面に雷文、胴に獅子と唐草文を描くE群の碗である。皿は、(119～124)等端反りの口縁で広い見込をもつB<sub>1</sub>群と、(126～129)等碁笥底の皿C群が多い。(119)は、高台内が露胎のB<sub>1</sub>群Ⅶの皿である。外面胴部と見込に同じ筆致で人物が描かれる。(120・121)は、外面に牡丹唐草文、見込に玉取獅子の組合せ、(122・124)は、外面に牡丹唐草文、見込に十字花文の組合せで、(123)は牡丹唐草文と花文の組合せである。(125)は、口縁が折縁になる例である。碁笥底の皿では、外面に波濤文と芭蕉葉文を組み合わせた(127・128)等が目につく。(130)の底部は、中心を厚く円錐状に削り出す。高台内は露胎で、「二」字の墨書がある。

(133)は交趾三彩の小皿である。径約5.4cm、高さ約1cmを測る。

**石製品** バンドコ、盤等456点が出土した。大半が笏谷石製品である。(134)は平面楕円形を呈するバンドコの蓋、(135)はD字形の例である。蓋は熱を受けて変色し、赤味を帯びるものが多い。身(136)は前面に7窓が開く。内面底部は粗いノミ痕を残すが、立ち上がり部分は丁寧な削る。(137)は、平面楕円形の盤である。四足が付く。内外面とも丁寧に削るが、外面底部はやや粗く、ノミ痕が残る。(141)は阿形の狛犬である。頭と台座の部分が出土した。目・鼻・口・指等細部に丁寧な彫刻が施される。(143)は板碑である。二体の五輪塔を刻んだものと思える。「永禄十一年□ □経妙祐 八月□□」を刻む。笏谷石以外では、硯が出土した。(138)は、平面長方形で、裏面を削り脚を作るI B aタイプである。(139)は、同じく長方硯であるが、脚の無いI B cタイプである。二次的に砥石として使用する。(140)は茶臼である。

8分画の擦り目は、追刻等で1単位15~19条とバラつきがある。

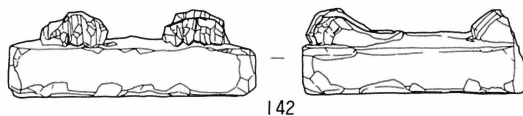
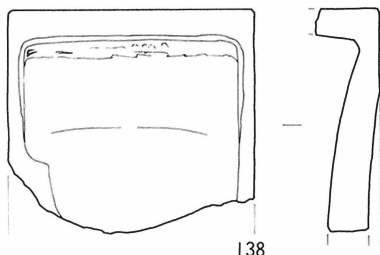
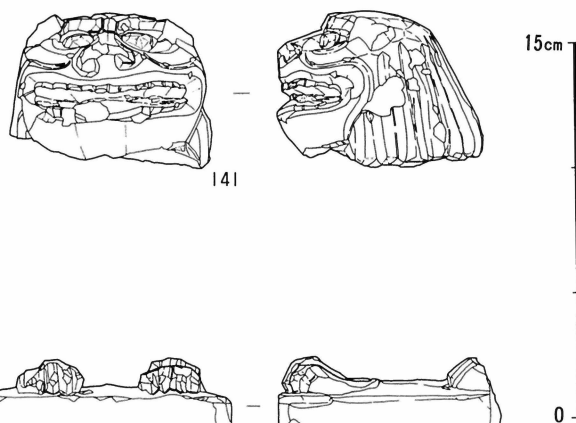
**その他の遺物** 時期不明の遺物が出土した。土錘(144)は、長さ約7.2cm、径約3.8cm、孔径約1.2cm、重さ約81.7gを測る。S A 3631を崩した濠埋土から出土した。(145)は、人面を刻む石製品である。石材は軟質で、重さ約29gを測る。S S 3650上から出土した。



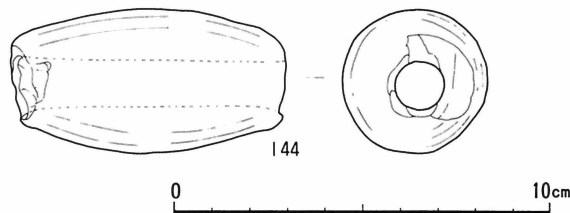
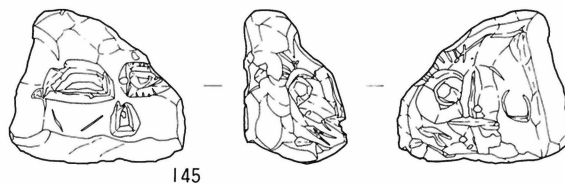
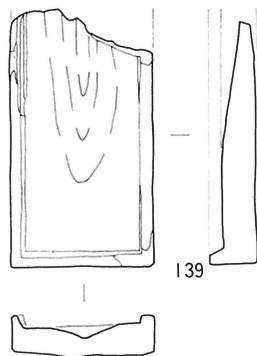
註① 越前焼の分類は、「県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告」1983による。

註② 土師質皿の分類は、「朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ」1979による。

註③ 中国製陶磁器の分類は、「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」貿易陶磁研究No.2. 小野1982による。



挿図4 石製品



挿図5 硯・その他の遺物

**上城戸に関する文献** 上城戸の状況については同時代の確実な史料に乏しく、軍記物などの二次的な史料にみえるだけである。いま『越州軍記』の関係部分を引用紹介する（『蓮如一向一揆』による）。まず同書一、永禄十一年五月十七日朝倉屋形へ御成御門役辻固ノ事には朝倉館から足利義昭の滞在した安養寺御所までの辻固の地点（ゴチック）が示されている。

同辻固之衆次第、大橋ノ通ニ魚住備後守、柳馬場ニ青木隼人佑、坂野ガ小路ニ桜井新左衛門尉、上殿ノ橋ノ通ニ氏家左近将監、遊楽寺ノ前ニ山崎小五郎、三輪小路ニ真柄備中守、笠間小路ニ真柄左馬助・川合虎福、魚住彦四郎前ニ北村平三左衛門、魚住前ニ富田民部丞、河原前ニ杉若藤左衛門尉、木戸ノ本ニ福岡幹千代、詫美前ニ佐々布光林坊、斎藤前ニ佐々布左京亮・小林三郎次郎、小林前ニ千秋因幡守・同左京亮、クラカリ谷ニ堀平右衛門尉、森前ニ瓜生孫六・同源四郎也

ここには上城戸の周囲に魚住前・河原前・木戸ノ本・詫美前・斎藤前などの地名がみえる。辻固の衆の名は『朝倉亭御成記』にもあらわれるのでこの記事はかなり記録性が高い資料をもとにしたものと判断される。

次に『越州軍記』四、富田弥六桂田ヲ退治之事の項には天正2年正月の一乗谷の攻防戦の叙述がみえるので以下引用する。

同式年正月十八日ニ、志伊(ノ)中郡ノ一揆蜂起シテ、所々騒動スルコト不斜、同十九日、一乗ノ上口・下口二手ニ分テゾ推寄ケル、下口ハ大野者共、其外志伊庄・坂北・本郷・棗三郷ノ者、弓箭・刀杖ヲ帯シテ、都合三万三千余人、蜻蜓蜚蟻ノ馬ノ五歳太ナルニ乗ツレテ、幻化ノ諸ノ形像ヲ出ガ如クニシテ、下ノ木戸口ヘゾ攻寄ケル、

上口ノ大将富田ガ其日ノ出立、殊ニ勝テ蓼ゾ見ニケル、(中略)、其次ニ毛屋・増井、雨夜冑・旄頭笠・半頬当シテ、筒丸ノ具足ヲキテ、物ノ具ヲ窺、鎧突ヲシテ寄来ル、此人ヲヲ始トシテ、府中表近郷ノ一揆都合拾万八千余、我ヲトラジトゾ馳来ル、

爰ニ又、桂田播磨守ガ出立、時ニ取テ珍敷ゾ見ニケル、(中略)、蟻蟻ノ馬ノ太遅ニ打乗テ、上ノ木戸口ノ幻城表へ懸出テ、四方ノ士卒ヲ下知スル有様ハ、漢ノ高祖・項王ノ勢モ、是ニハ過トゾ見ニケル、然ニ長俊、駒打ヨセ、虎口ノ体ヲ問バ、小林ハ木戸ヨリ外、山ギワニ、百騎計ニテ啓ヘタリ、長俊使者ヲ遣シテ、何トテ小林殿ハ其ニ御入候、柵ヨリ内へ来候ヘト云、小林聞テ、左候、此处ニ在テ、木戸ニ付敵ヲ横箭ニ射候ベシト申程ニ、最ト云ヒ、又下ノ木戸口ハ、小河党其外寄合衆ナルガ故ニ無覚思テ、駒引返ス処ニ、富田勢増井・毛屋猪介五六百人、木戸ヲ破却シテ、一度ニ跋ト攻入程ニ、内ナル軍兵ドモ一支モ不支シテ、サツト崩ケリ、愍哉、長俊心ハ剛ナリト云ヘドモ、目ハ不見、敵ハ弓手ニアレバ妻手ヲ払ヒ、南ヨリ攻懸レバ北ヲ打払テ、惘然ハテタル有様ナリ、斯臬処ニ、軍勢攻ヨツテ、馬ヨリ既ニ突落シテ、ハヤ頸ヲゾ取ニケル、同正月廿日ノ朝ノ霜トゾ消ニケル、

越前守護代桂田長俊の居る一乗谷が上口・下口の二方から攻撃を受けたのである。これによ

れば上城戸付近には木戸・柵・上ノ木戸口ノ幻城表（未詳）などがあって、守将小林某は木戸から外に出て山際に百余騎でひかえて木戸にとりつく敵兵を横矢に射ようとしたという。この記事は軍談的性格が強く、後日逸話をまとめたものであろう。また行文が不明確であるが、この時上城戸から軍勢が侵入し陥落したものと判断される（概報XⅧに下口としたが訂正する）。

この他に『越前国古城跡并館屋敷蹟』や古絵図などに記載があるが省略する。

**上城戸出土の木簡の内容** 今回の調査で外濠西端トレンチから2枚の木簡が出土した（以下A、Bという）。その文字内容の調査概要を述べる。A・Bいずれも片面にのみ文字が記され、裏にはない。Aは「たくみ殿まいる 宇左」、Bは「貳丁 たちまち」と書かれている。Aの「た」「み」はそれぞれ「多」「三」の草仮名、「まいる」「殿」は書状などに用いられる独特の書体で書かれている。Bは墨の色がほとんど残らず、わずかに字が浮き上がって残っている程度であったが判読可能であった。2点ともによく書きなれた筆致で丁寧に書き入れられている。

Aは「宇左」という人物から「たくみ殿」に宛てて何らかのものを進上するという意味である。「宇左」は戦国期によくみられる名字と官途をそれぞれ一字ずつ組合せた人名表記法と思われる、今のところ該当者は未詳であるが、朝倉氏の譜代の家臣の宇野氏に比定されよう。また「たくみ殿」は、これも譜代の重臣の詫美氏の当主を指すものであろう。前掲の御成の辻固の記事から詫美氏の屋敷は木戸ノ本と斎藤前との中間に想定されるが、本木簡の出土は詫美氏の屋敷の場所を明らかにするためにも重要な資料を提供するものである。またこの木簡の両側面には上中下の計6ヶ所に切れこみがあり（中の部分の切れこみは表面にだけ刻まれていて裏まで通っていない）、それは何らかのものを糸で括りつける機能を持っていたと推定される。また文字内容も宛名・脇付・差出であり、このような内容と機能は書状の封紙上書きによく似ている。本木簡の出土は一乗谷における朝倉氏の家臣相互間のやりとりを実証したものであり、また書札札や古文書の研究上も貴重な資料となるものである。

Bについては記載も簡単で内容も確定しにくいのであるが、「貳丁」は一般的には物品の数量（挺）もしくは距離・位置・面積（町）を示すが、特定できない。また「たちまち」は千秋氏の一族で立町郷（現鯖江市立待）を名字の地とする立町氏とみるのが妥当であろう。

千秋氏は室町幕府の奉公衆の家柄として知られる大族で、越前では15世紀中頃に越知山地頭職・糸生郷山方・野田郷など丹生郡南部の一帯に所領を持っていた。また加賀では15世紀後半に江沼郡熊坂庄の地頭に千秋氏がみえ、またその頃同郡横北庄代官を勤めた千秋（立町）伊豆守は同郡の在地有力武士であった（加賀市史通史上巻）。

また寛正元年4月に幕府が河口庄細呂宜郷以下の遵行につき千秋・立町氏に合力を命じていることや、文明元年7月に越前の戦況につき朝倉孝景と立町某が合流して斯波義敏方についたという偽の情報が流れたことは（安位寺殿御自記）、この時期の立町氏の軍事的重要性を示すものである。本木簡は年代未詳であるが、立町氏に関する数少ない確実な資料となるであろう。

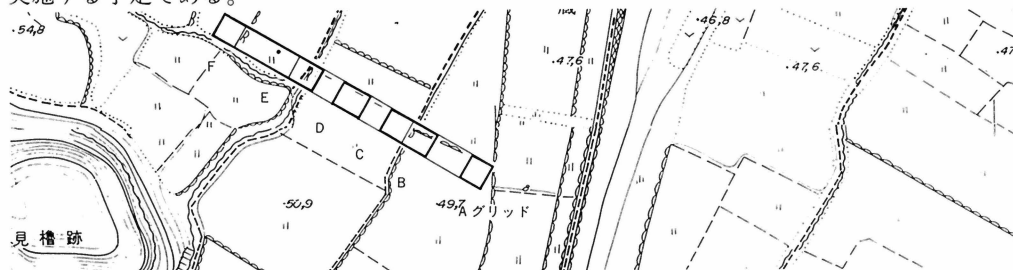
## 第 63 次 調 査

本調査は、昭和63年12月2日より19日までの期間、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡にかかる城戸ノ内町字木蔵の地係において実施したトレンチ調査である。調査の目的は、従来の面的な遺構確認調査では十分把握し得ない、一乗谷内の城下町の構造に関して、その必要と思われる地点に最小規模のトレンチを設定し、その地点での遺構の検出を通じて、合理的かつ円滑に全体的な城下町の構造を把握するために不足を補い実施しようとするものである。

今回はその第1回目にあたり、史跡整備計画の第3の拠点である赤淵・奥間野地区の数次に亙る調査で明らかにされた、寺院・武家屋敷群における「南北幹線道路」が初期の調査で確認されている平井地区の武家屋敷群の「南北道路」と、どの地点でどのように連結しているのかを探る目的で設定された。トレンチを設定した地点は字斎藤との境界に近い、八地谷の南側、月見槽下である（P.L. 21上）。東西方向60m、南北3mのトレンチで、10mおきに3×3mのグリッド掘りを実施し、遺構が検出された箇所については逐次拡張し、各グリッドを繋いでいくこととした。面積は約200㎡であった。

調査の結果、トレンチ東寄りの1段目の水田面（Bグリッド西）で、南北に走るものと推定される、幅約1.8mの砂利敷「道路状遺構」を検出した（P.L. 21下）。2段目の水田の畦石垣が南北方向に積み上げられており、砂利面の土層はかなり荒れているが、厚く整地されており長期に亙って使用された道路と推定される。発掘調査の所見からこの道路の幅は旧水田の畦石垣下に続くが、畦の上には2段目の水田面の遺構、少なくとも井戸を伴う遺構面（Cグリッド）があり、畦石垣1列分を取り外した部分以上は幅は広がらず、最大限に見積もっても約2mと判断される。

これより西側、2段目の水田面（C・Dグリッド）では前述したように井戸、幅約6mに亙って広がる砂利敷面、石列等々を有する屋敷跡が確認された。更に西側の、3段目の水田面（E・Fグリッド）では南北に延びる小土塁、礎石列、溝状遺構、甕埋設遺構2、砂利敷面等々を検出し、屋敷が2区画に亙っているものと推定された。この調査は次年度においても引き続き実施する予定である。



挿図6 第63次調査区トレンチ(グリッド)設定図

## 環 境 整 備

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏が領国支配の拠点として築いた「町」が山城や城戸そして居館・武家屋敷・寺院・町屋と面として良好に遺存し、我国の歴史を知る上で欠くことの出来ない史跡として広く知られている。そこで、この良好に遺存する遺構をして「自らを語らせ」、これにより、ここを訪れた人々が「歴史と生きた対話をする事」を目指して昭和47年「史跡公園化計画」をスタートさせた。本年は、昭和61年に始まる「中期計画」に基づき、第51・52次発掘調査の結果を受けての平面復原整備と見学者の休養の場を提供し、合わせて周辺環境を整えるため、朝倉館と濠をはさんで南に相対する新御殿の修景整備を実施した。以下、その概要を報告する。

### 第51・52次調査区整備工（P L. 22～27、第14～16図）

この工事は、昭和60年度に第51・52次調査として発掘を実施した福井市城戸ノ内町字吉野本地係約3,350㎡を対象とする平面復原による保存整備事業である。この工事は設計は当資料館で行い、この設計書に基づき、入札により施工者を決定し実施した。工事は昭和63年9月1日に着工し、同年11月7日に完成した。

この工事対象となった第51・52次調査区の存在する地区は、城下町一乗谷の中心である城戸ノ内の中程、一乗谷川の西岸に位置し、これまでに約26,000㎡という広い範囲が面的に発掘調査され、その全体像がほぼ明らかとなっている。すなわち、一乗谷川と平行して地区の東に設けられた幅約8mの南北方向の道路と、これから西の山裾へ向って延びる約107m間隔で配された3条の東西方向の道路を町割の骨格とする。そして、南北方向の道路に沿っては町屋と推定される敷地間口約6～9m、奥行約13～15mの小屋敷群が、西の山裾へ向う東西方向の道路に面しては寺院や武家屋敷と推定される土塁や門を持つ規模の大きな屋敷が多く配されている。こうした計画的に造られた町並を平面的に復原展示することを主眼としてこの地区の保存整備を進めている。

こうした地区にあって、今回の工事対象地は、その南端に位置し、北は幅約8mの東西方向の道路、西は、この道路から南へ延びる幅約3mの南北方向の道路で大きく区画されている。北の東西方向の道路に面しては、ほぼ中程に出土遺物から医師が住したと考えられる小土塁と門を持つ屋敷が存在し、東西には小屋敷群が存在する。ここには袋小路などがあって、これによって、この小屋敷の裏には大きな屋敷が展開している。南北方向の道路は、西の山裾に存在する一段高い大区画との境界となっており、道路の西面には比較的大きな石を用いた高い石垣がみられる。この道路の東面には土塁を持つ大規模な屋敷があって、南端近くには門も存在す



る。また、この地区の東南部は南から延びる袋小路によって開発された小屋敷群が存在する。こうした遺構を基本的には露出展示することを整備方針とした。そのため、町割を示す道路や土塁・溝などの石垣や石列を補修し、道路は砂利敷舗装、中・大規模屋敷内は赤土舗装、小屋敷群は砂利混ソイルセメント舗装、礎石建物はレミファルト舗装とすることによって表示した。また、井戸や石積施設の石積を補修すると共に、井戸には出土例から復原製作した石製井戸枠を、出入口の一部には石製踏石を設置した他、要所には高木を植栽した。

以下参考までに工事仕様の概要を示す。

**盛土・整地工** 検出遺構面の保護を計り、合せて舗装材との間に層を形成し、また整備工事に支障のないよう遣方にならって山砂で埋戻し整地した。

**石積補修工** 検出した溝・石積施設・井戸などの石積遺構の内、孕みが大きく崩壊の可能性の強い所や後世に壊された所は、発掘時に撤去した石を用いて周囲の遺構に習い積直しを行った。

**石垣補修工** 径1 m前後の大きな石を用いた高さ2 m近い石垣は、重機を用いて積直すと共に、裏込等も念を入れ補修した。使用した石は主として転石である。

**砂利敷舗装工** 山土を薄く敷き、この上に並砂利を5 cm厚で敷き展圧した。

**赤土舗装工** 良質の赤土0.7m<sup>2</sup>に対し砂利0.3m<sup>2</sup>の割合で配合し、0.7cm厚に展圧整形した。

**砂利混ソイルセメント舗装工** 良質の山砂0.15m<sup>2</sup>当りセメント1袋(40kg入)を加え、少量の水で良く混合し、敷均しの過程で砂利0.15m<sup>2</sup>を均等にバラまき押し付け、砂利の表面が少し現われるよう考慮した。厚は7 cmで、木ゴテで整形した。なお、直後に山砂を薄くまき、硬化後これを掃き去ることで自然な表面処理が可能なが判明した。

**ソイルセメント舗装工** 溝や石積施設の底は、山砂0.3m<sup>2</sup>当りセメント1袋(40kg入)を加え、少量の水で良く混合し、厚5 cm程度に木ゴテで整形した。

**レミファルト舗装工** 礎石建物はその平面プランをアスファルトブロック(25×120×240)で示し、内部は、まず碎石を厚3 cmに展圧し基盤を作り、この上にレミファルトを仕上り厚5 cmに展圧整形した。抜き取りの明らかな礎石を補充した他、仕上り舗装面の排水勾配上不都合な礎石はその直上に偏平な同大の石を置き、礎石配置を表示した。

**芝張工** 高麗芝片を目地幅3 cm程で張りつけ、山砂を厚薄のないようまき目地を埋めた。斜面にあっては竹串を用いて固定した。

**高木植栽工** 樹種はアカマツ、ケヤキ、ヤマモミジ、ヤナギである。十分に吟味した樹木を用い、遺構保護のため鉢の高さほどに盛土の上植栽した。土壌改良剤を加え、鉢の周囲には芝を張り付けた。樹木の大きさは高3 m、幹廻0.15m程度とし、二脚鳥居支柱を付した。

**井戸枠復原設置工** 井戸の径によりこれまでの出土例から2種の凝灰岩(笏谷石)製井戸枠を復原作成し、これを設置した。

**踏石復原設置工** これまでの出土例に習い幅0.6m、長0.9m、厚0.12mの凝灰岩(笏谷石)製

の踏石を復原作成し、これを2枚セットで出入口の溝上に設置した。

**昇降用石段作成工** 南北方向の道路を見学者の園路として利用するため、南端に径0.2～0.3m程の石を用いて5段の石段を作成した。

**暗渠排水路敷設工** 下層遺構の溝を利用したり石垣裾を深さ30cm×幅30cmで掘鑿し、ネトロンパイプ（φ100mm）を敷設し、周囲には砂利を入れ、地下水や伏流水の排水対策としての暗渠排水路を設けた。

#### 新御殿修景工（P.L. 28、第17図）

工事対象地は、これまでの調査により朝倉氏5代の当主義景が住していたことが明らかとなった朝倉館と濠を隔てて南に位置する区画で、福井市城戸ノ内町字新御殿地係約2,500㎡である。この地は、昭和46年の特別史跡指定以来、調査研究と史跡管理の拠点として長く仮設建物が設置されていたが、これらの建物も資料館や公園センターの開設に伴い撤去された。しかし、この地は前述したように朝倉館の南にあって、また東の段丘上には義景の母が住したと伝えられる中御殿も存在し、見学者の拠点として重要な場所である。そこで、こうした見学者の休養の場として活用し、あわせて地下遺構の保護と区画を表示することを目的として、盛土整地の土芝生の植栽を行うこととした。当資料館において工事の設計を行い、この設計書に基づいて入札の上、施工者を決定し、昭和63年10月12日に着工し、同年11月25日に完成した。工事は、まずカヤ等の雑草の株を除去し、山砂を平均約10cm厚に敷き展圧し、高麗芝を目地幅3cm程で張り付けた。また山裾にサクラの高木を植栽した。

PL. 1



第61・62次調査・上城戸（西から）



第51・52次調査区整備工全景（南から）



上城戸全景 (北から)



上城戸全景 (南から)



▲ 上城戸 (西から)

◀ 濠 SD 3634  
(西から)



土塁 SA 3631 (北から)



土塁 SA 3631 (北西から)



土塁 石垣 SV 3651 (西から)



石垣 SV 3655・SV 3656 (北から)



▲ 道路 SS 3650  
(東から)

◀ 道路 SS 3650  
(西から)





◀ 道路 SS 3650  
西半(東から)

道路 SS 3650 ▶  
東半(西から)



PL. 8

第61・62次調査・遺構(7)



◀ 道路 SS 3650  
溝 SD 3638 (西から)

▶ 道路 SS 3650  
溝 SD 3637  
暗渠 SZ 3662  
(西から)





土塁 石垣 SV 3659 (北から)



井戸 SE 3643 (北から)



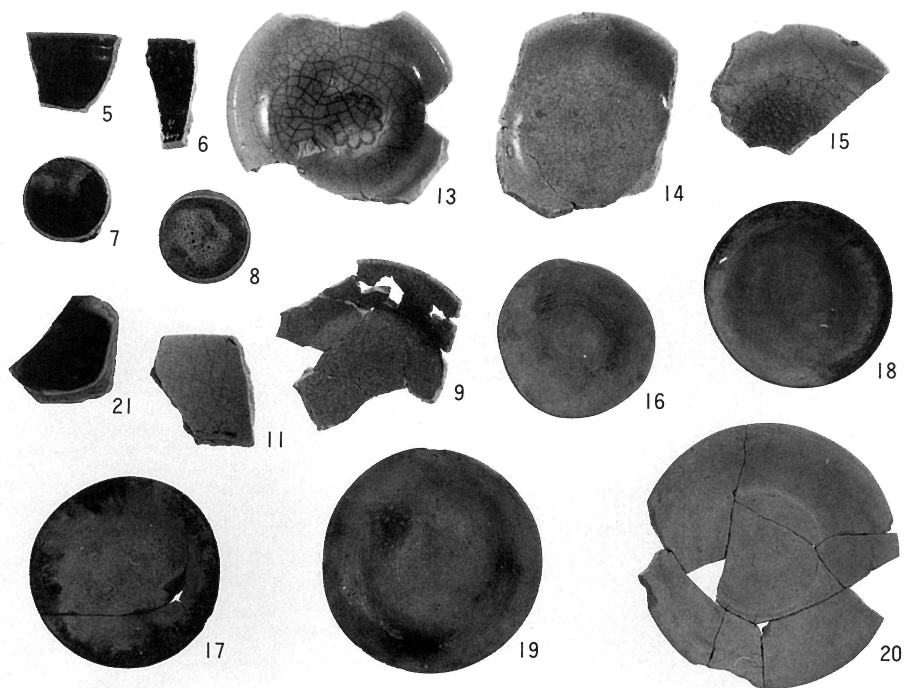
石積施設 SF 3644・3645

(北から)

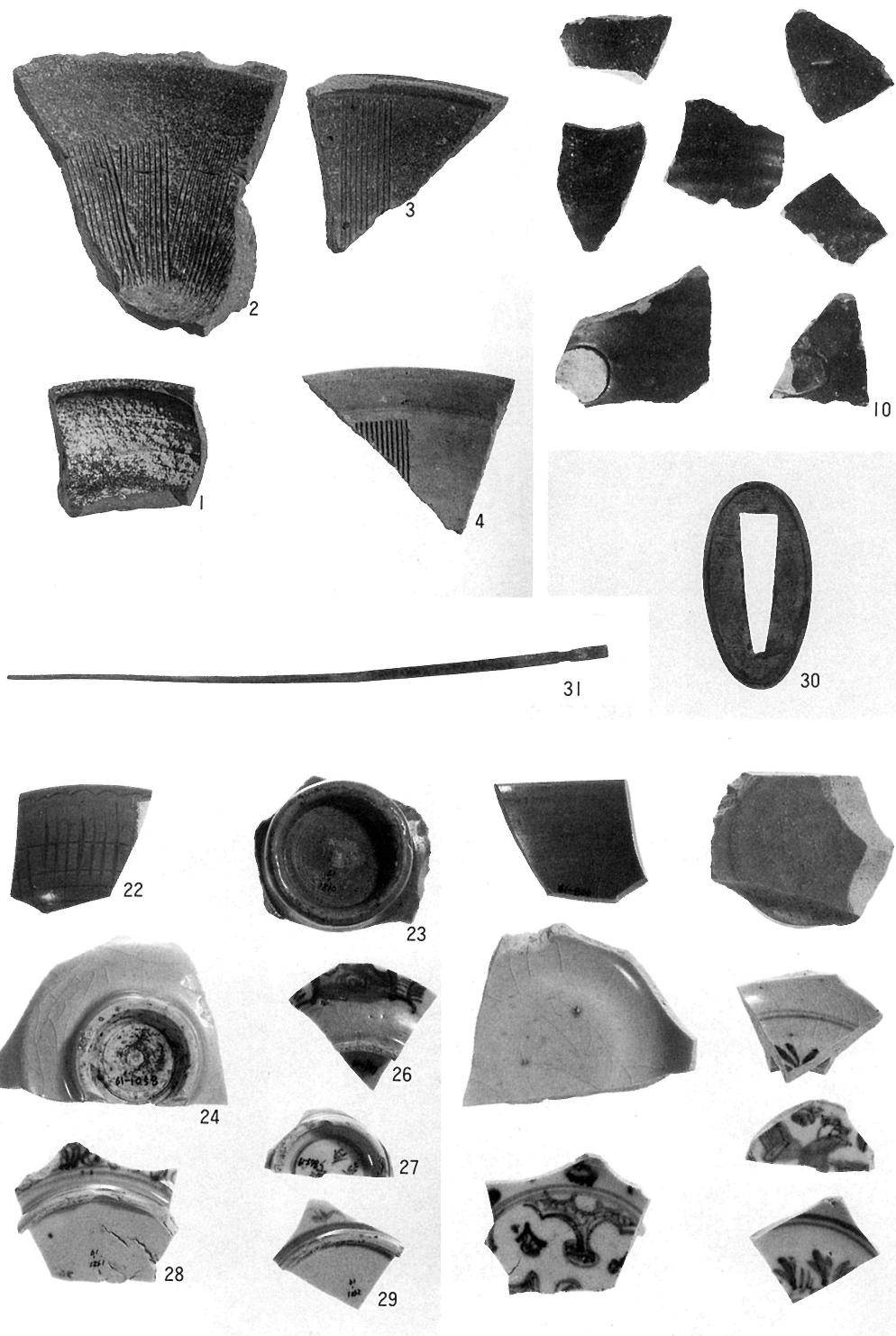


石積施設 SF 3648・3649

(西から)



SD 3634 出土遺物 5~8 鉄釉碗, 9 黄瀬戸皿, 11 灰釉碗, 13~15 同皿, 16~20 土師質皿,  
21 瓦質香炉



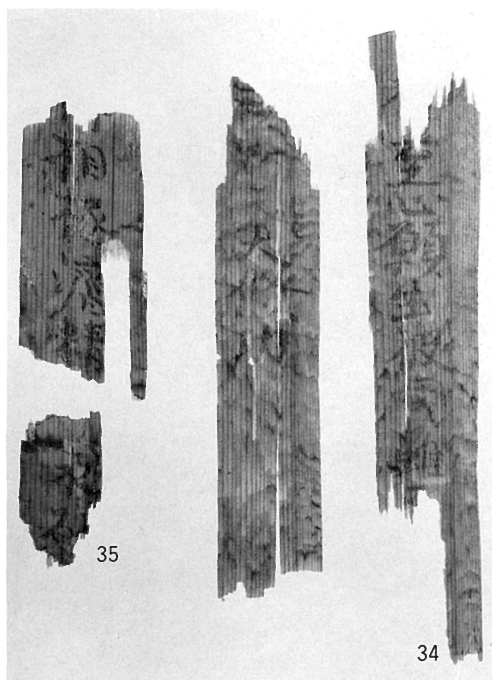
SD 3634 出土遺物 1 越前焼鉢, 2~4 同播鉢, 10 鉄釉壺, 22・23 青磁碗, 24 青白磁皿, 26・27 染付碗, 28・29 同皿, 30 鉏, 31 銅製箸



32



33

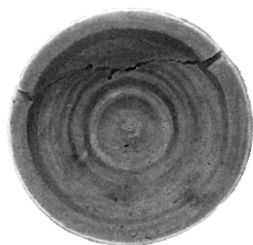
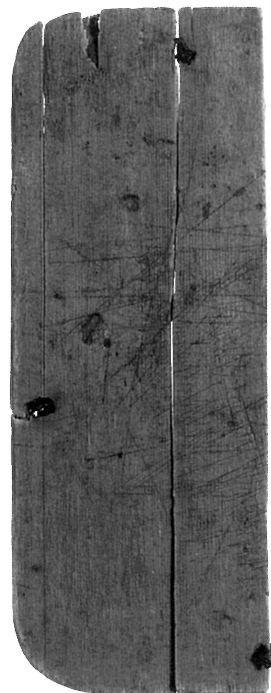


35

34

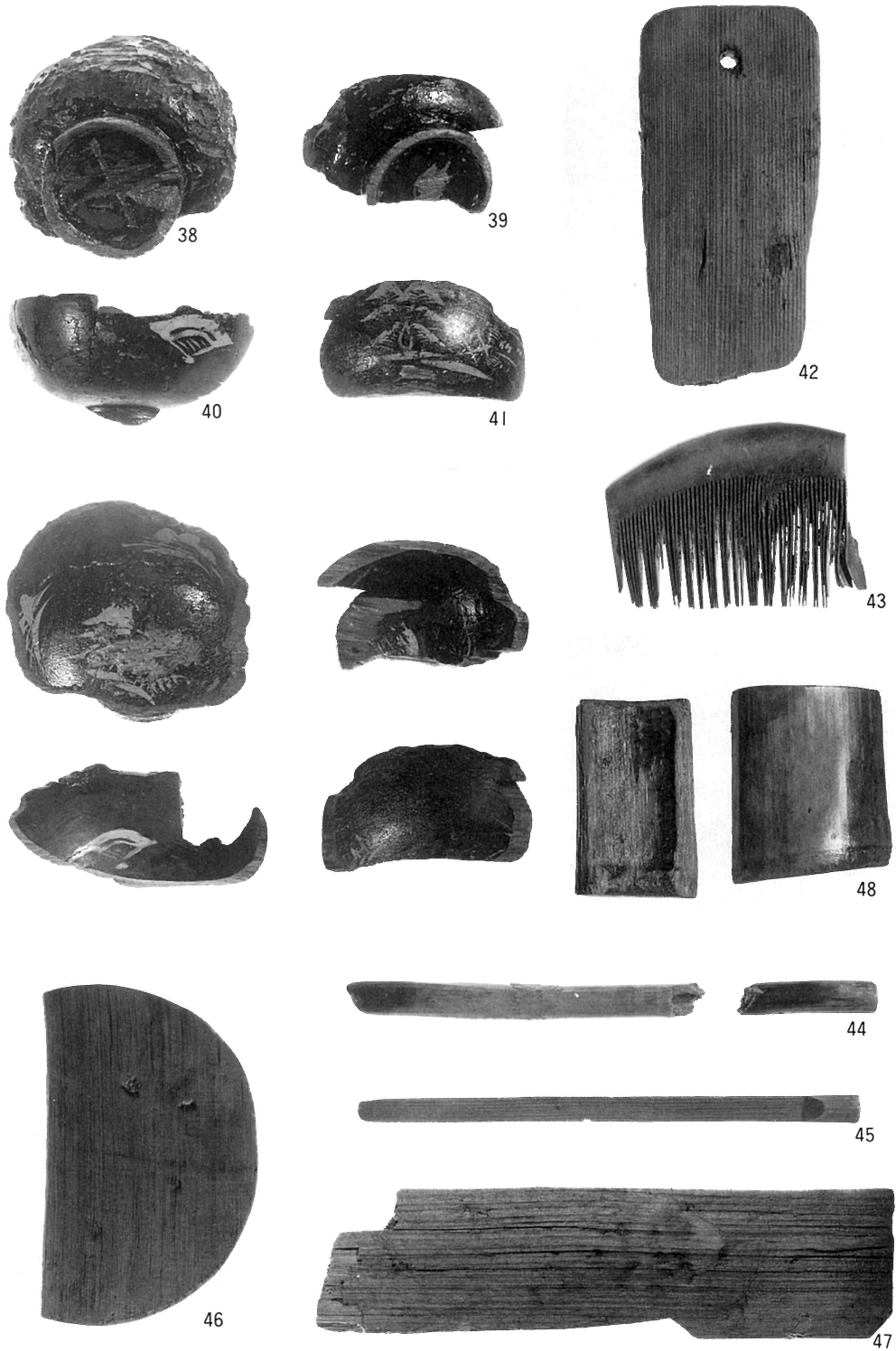


36



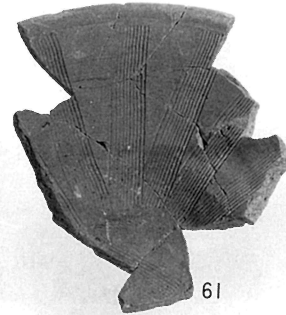
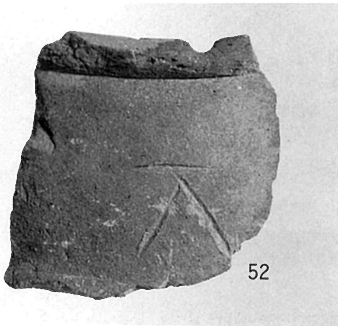
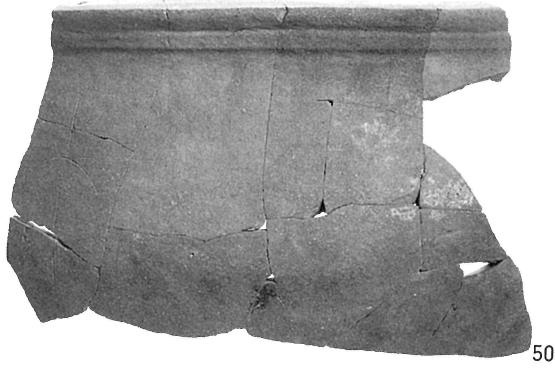
37

SD 3634 出土遺物 32 付札, 33 墨書木製品, 34・35 柿経, 36 折敷, 37 独楽



SD 3634 出土遺物 38~41 黒漆碗, 42 下駄, 43 櫛, 44・45 加工木製品, 46 曲物, 47 折敷, 48 加工竹製品

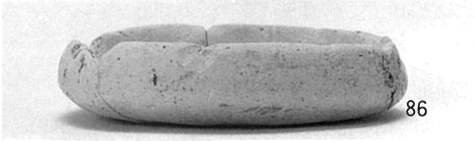




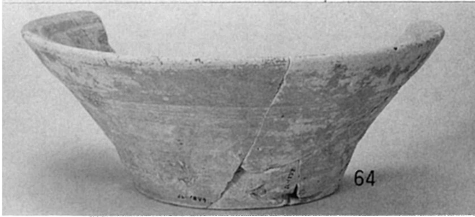
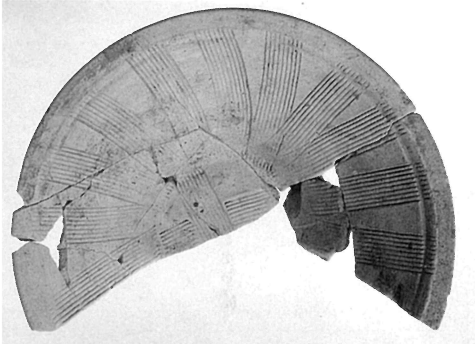
49・50 越前焼甕, 52・54 同壺, 56 同鉢, 59～63 播鉢



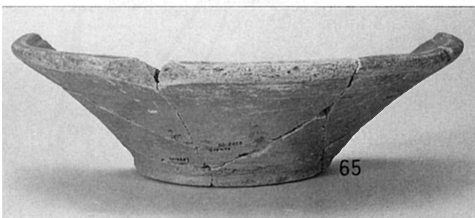
84



86



64



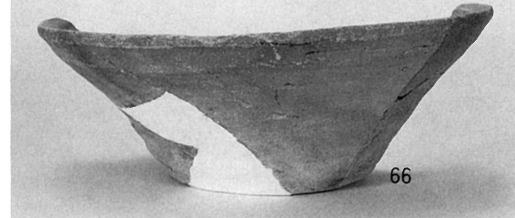
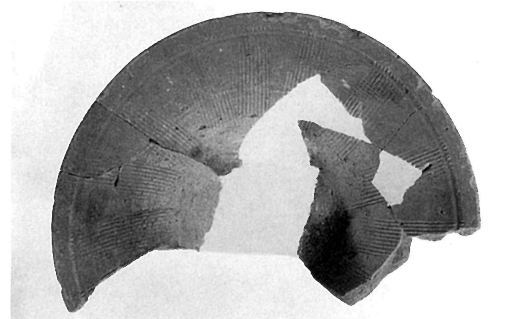
65



96

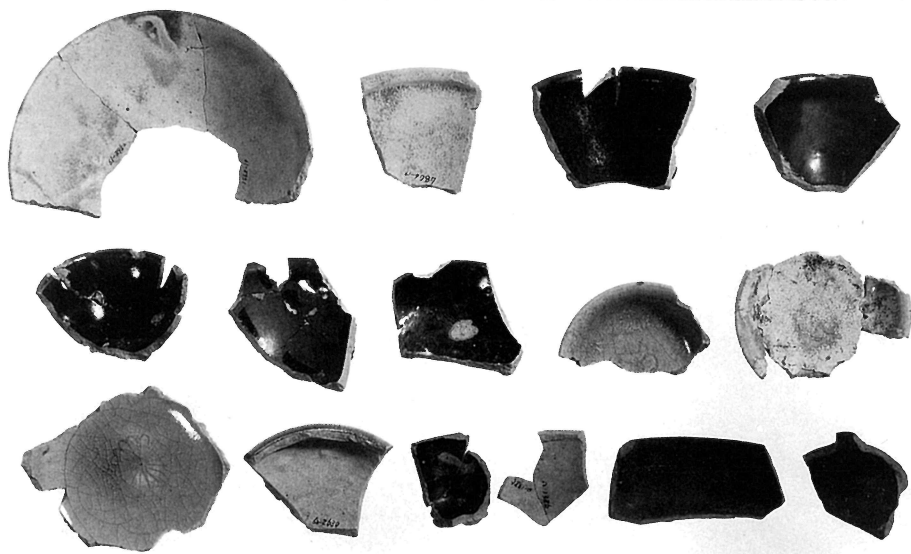
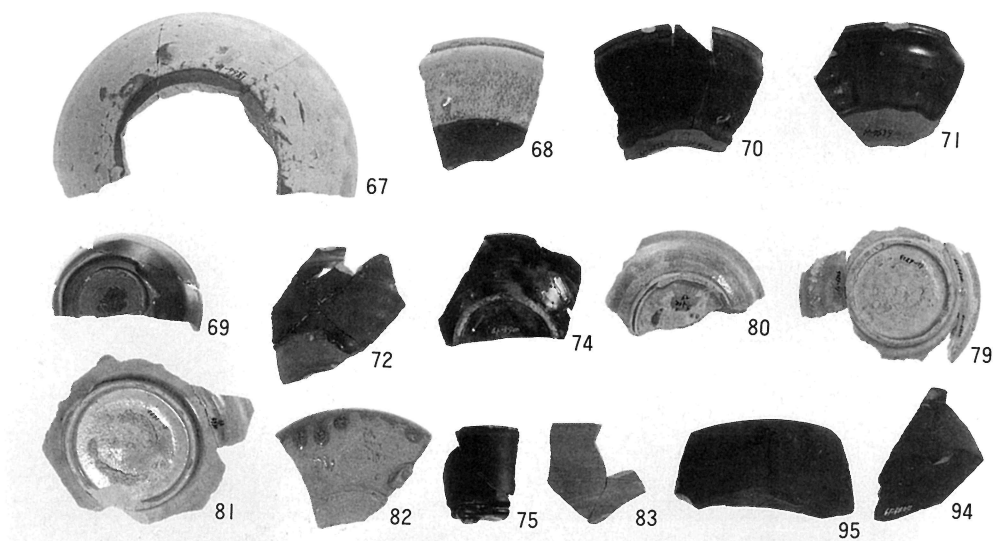
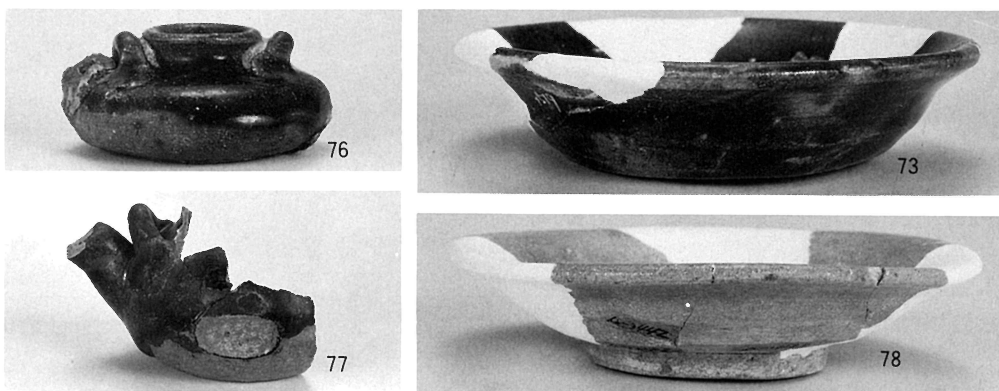


93

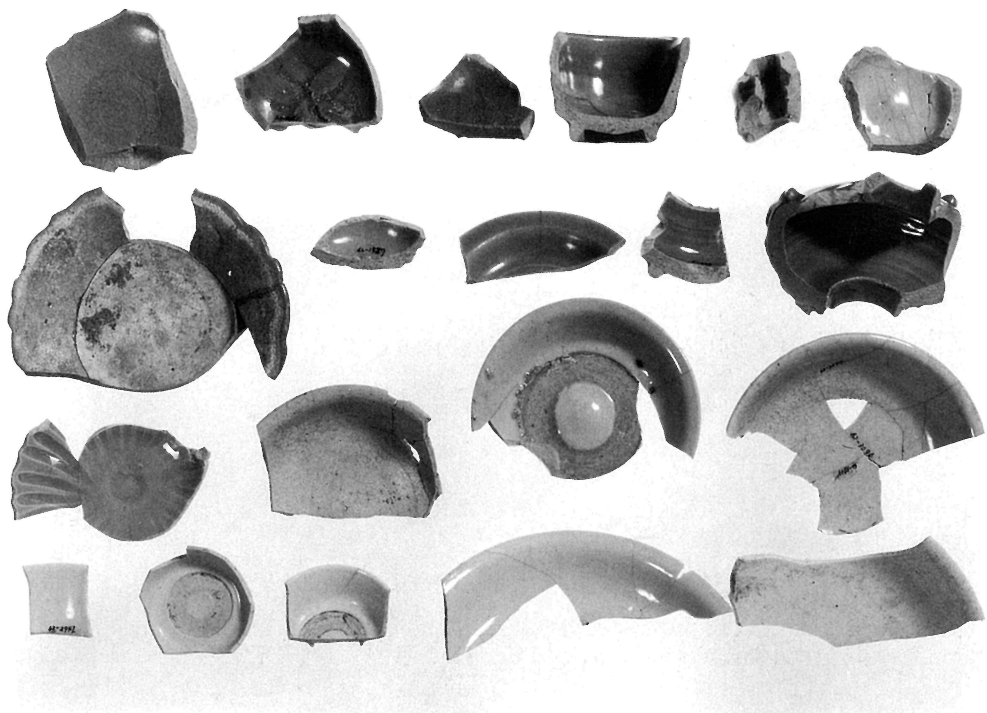
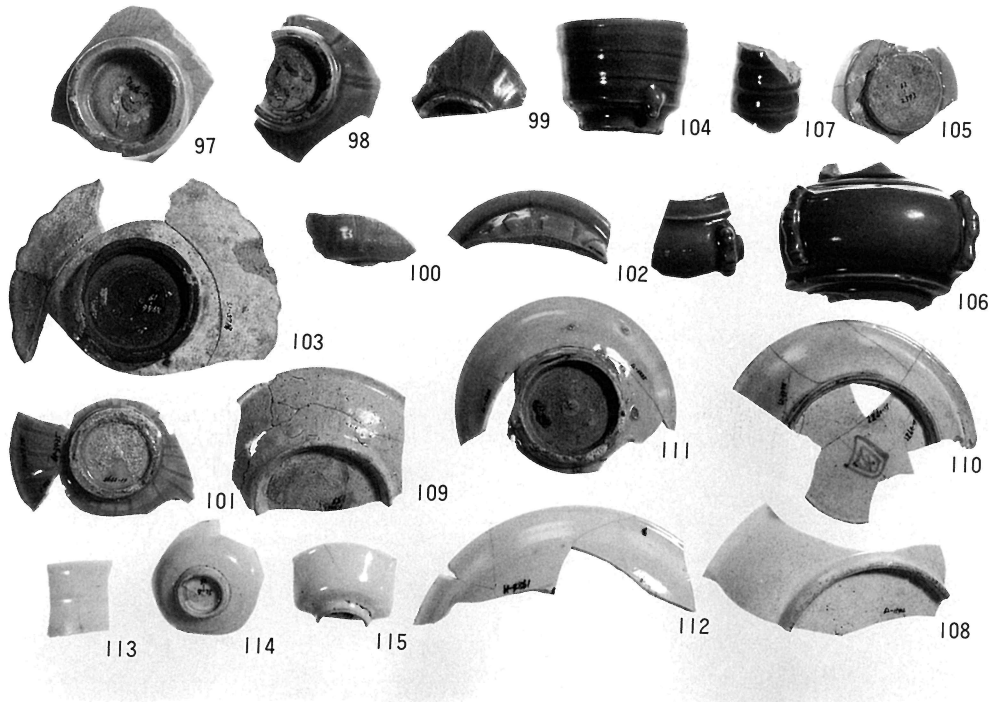


66

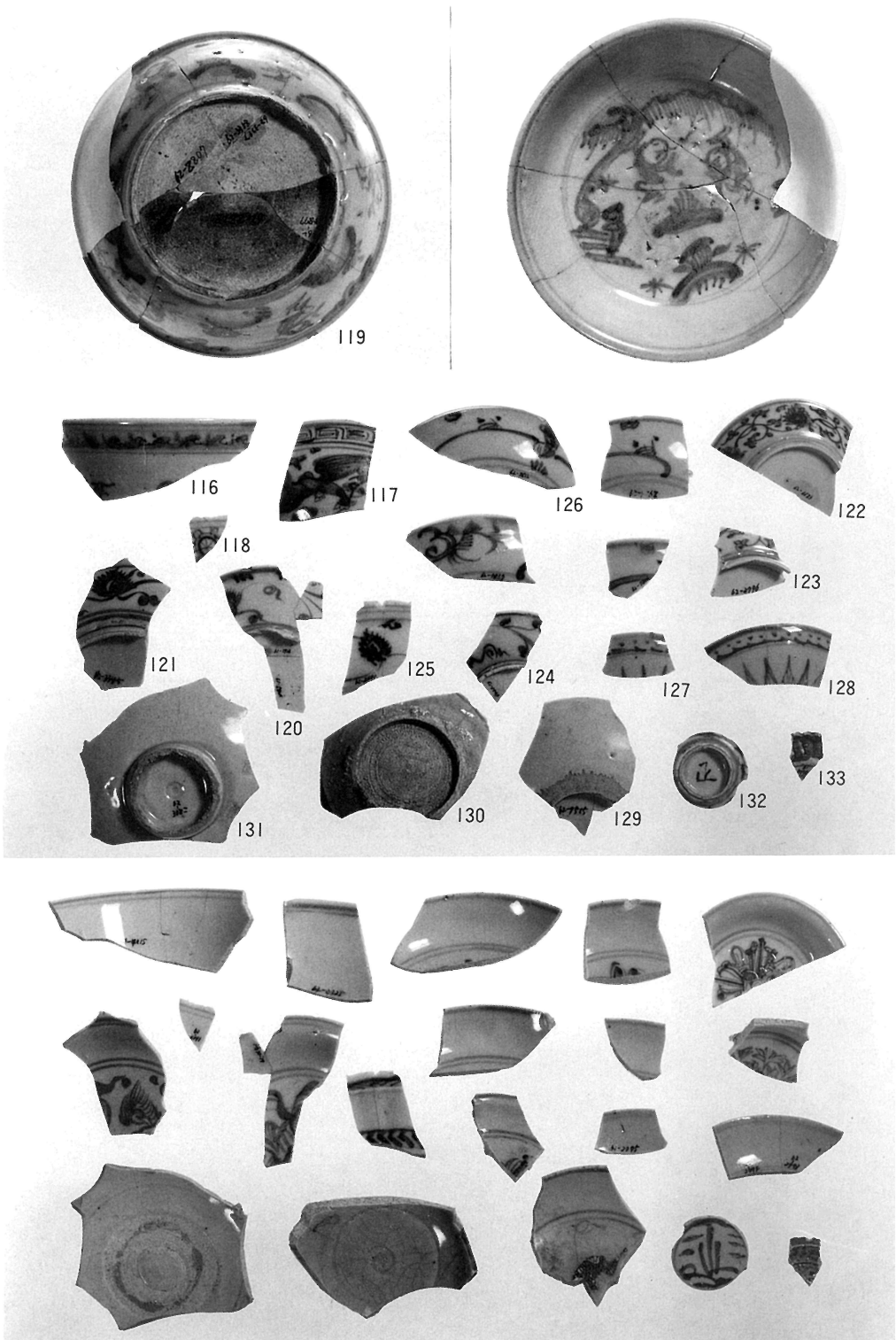
64~66 越前焼播鉢, 84・86 土師質皿, 93 同土釜, 96 瓦質華瓶



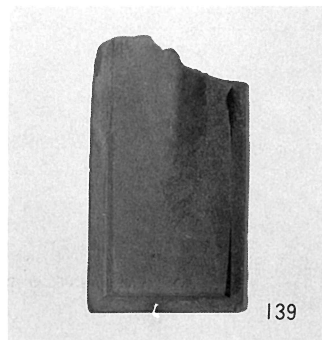
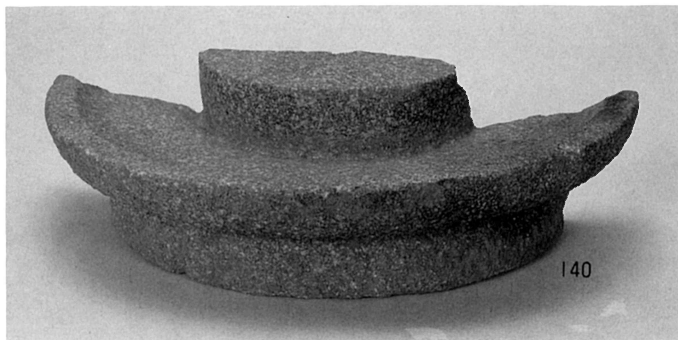
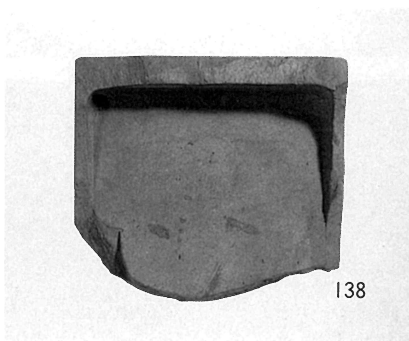
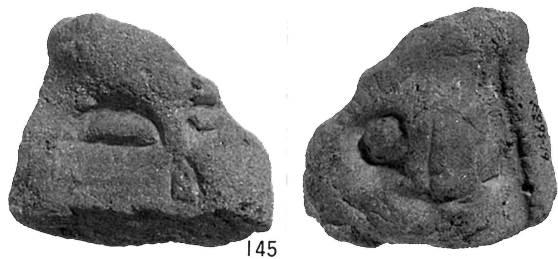
67・68 黄瀬戸碗, 69~72 鉄釉碗, 73・74 同皿, 75 同香炉, 76・77 同水滴, 78~81 灰釉皿, 82 同香炉, 83 瀬戸香炉, 94・95 瓦質香炉



97~100 青磁碗, 101~103 同皿, 104・105 同香炉, 106 同花瓶, 107 同瓶, 108~112 白磁皿, 113~115 同坏



116~118 染付碗, 119~131 同皿, 132 同坏, 133 交趾三彩皿

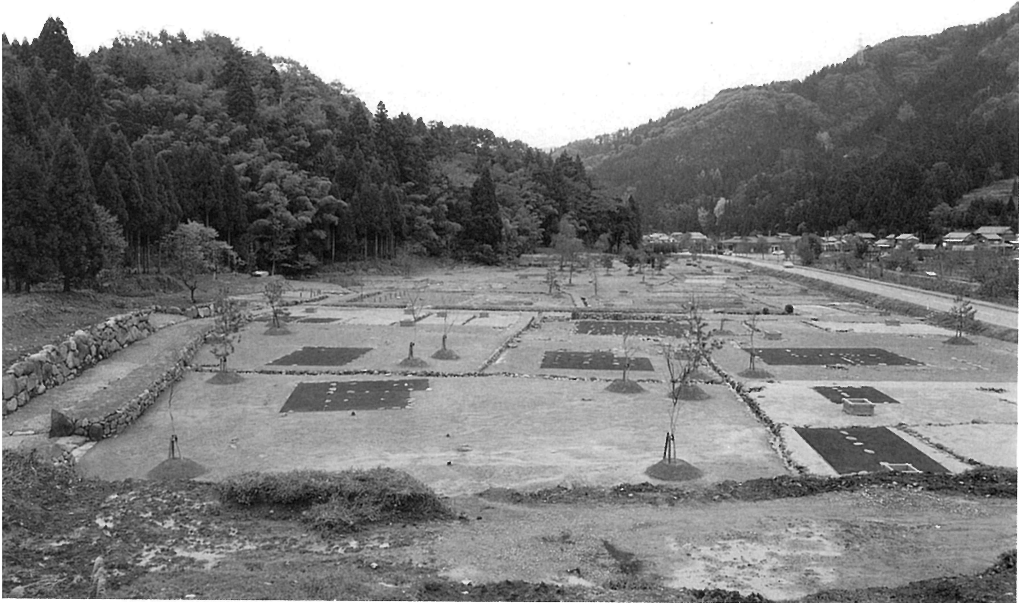


136 バンドコ(身), 138・139 碗, 140 茶臼, 141・142 狛犬, 143 板碑, 145 加工石製品



上 調査区全景  
（東から）  
下 道路状遺構  
（南から）



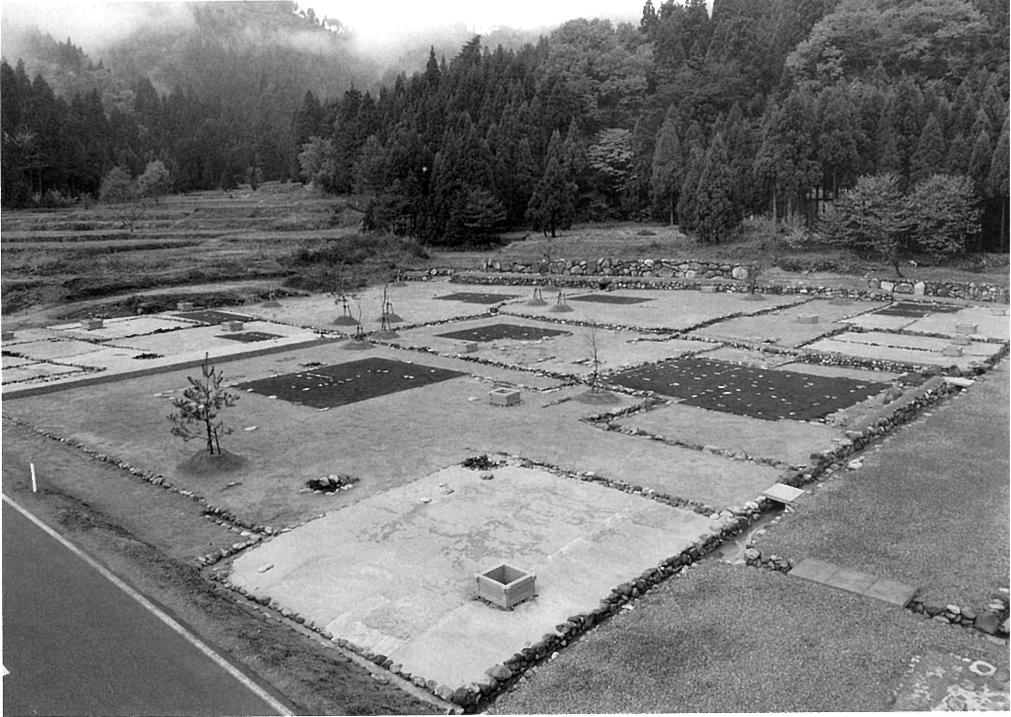


全 景 (南から)



全 景 (東南から)





全 景 (東北から)



全 景 (西北から)



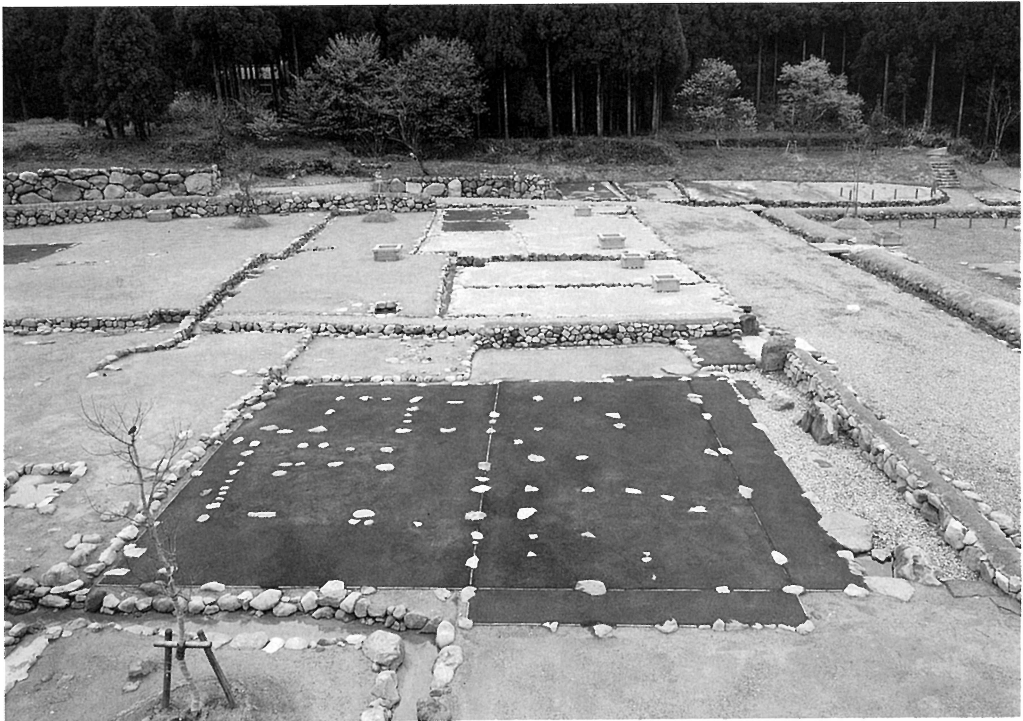
東 半 部 (南から)



西 半 部 (北から)



医師屋敷 (北から)



同・礎石建物 (東から)



南北方向道路と門 (南から)



医師屋敷の門と踏石 (北から)



井戸枠 (2種)



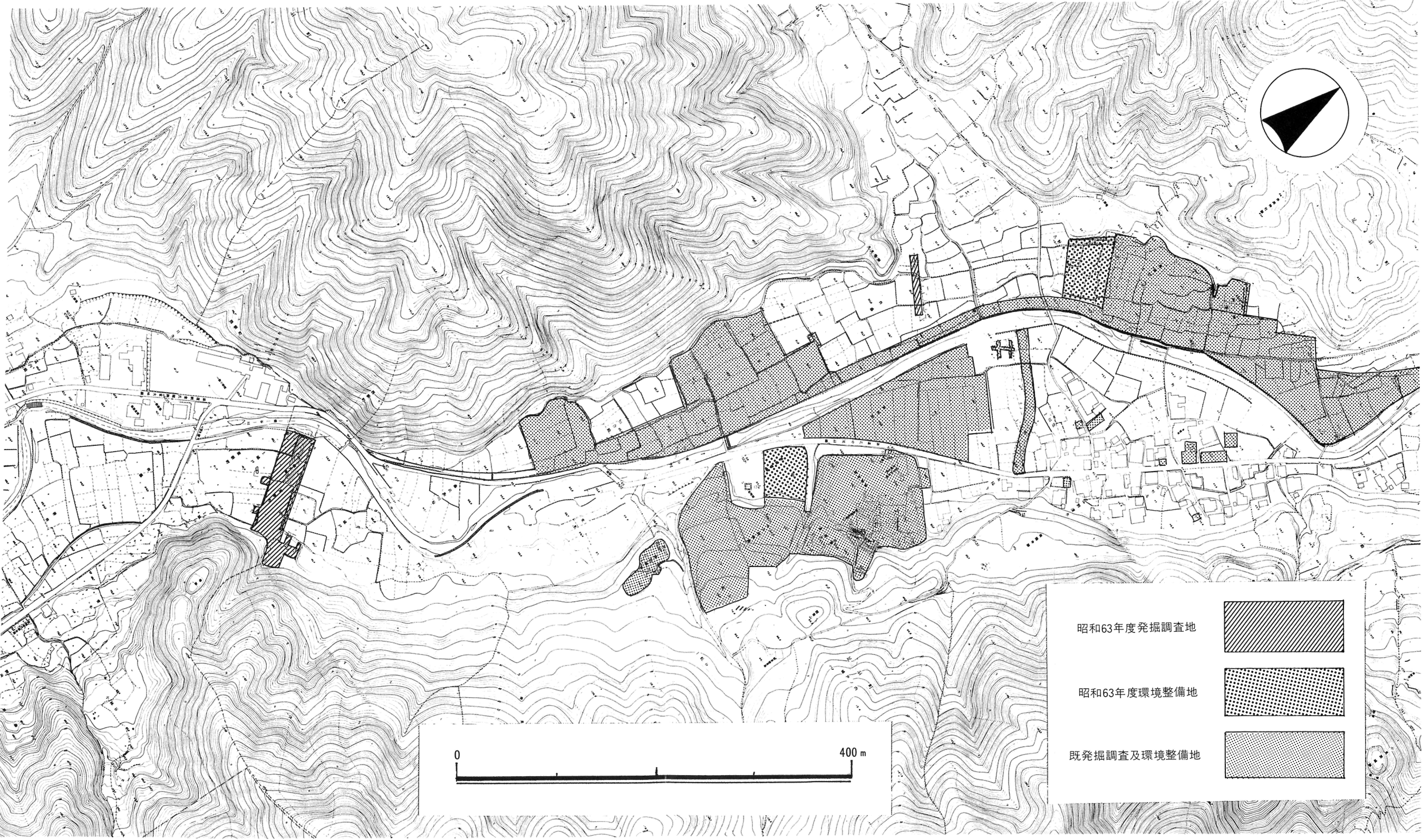
昇降用石段 (南北方向道路から)

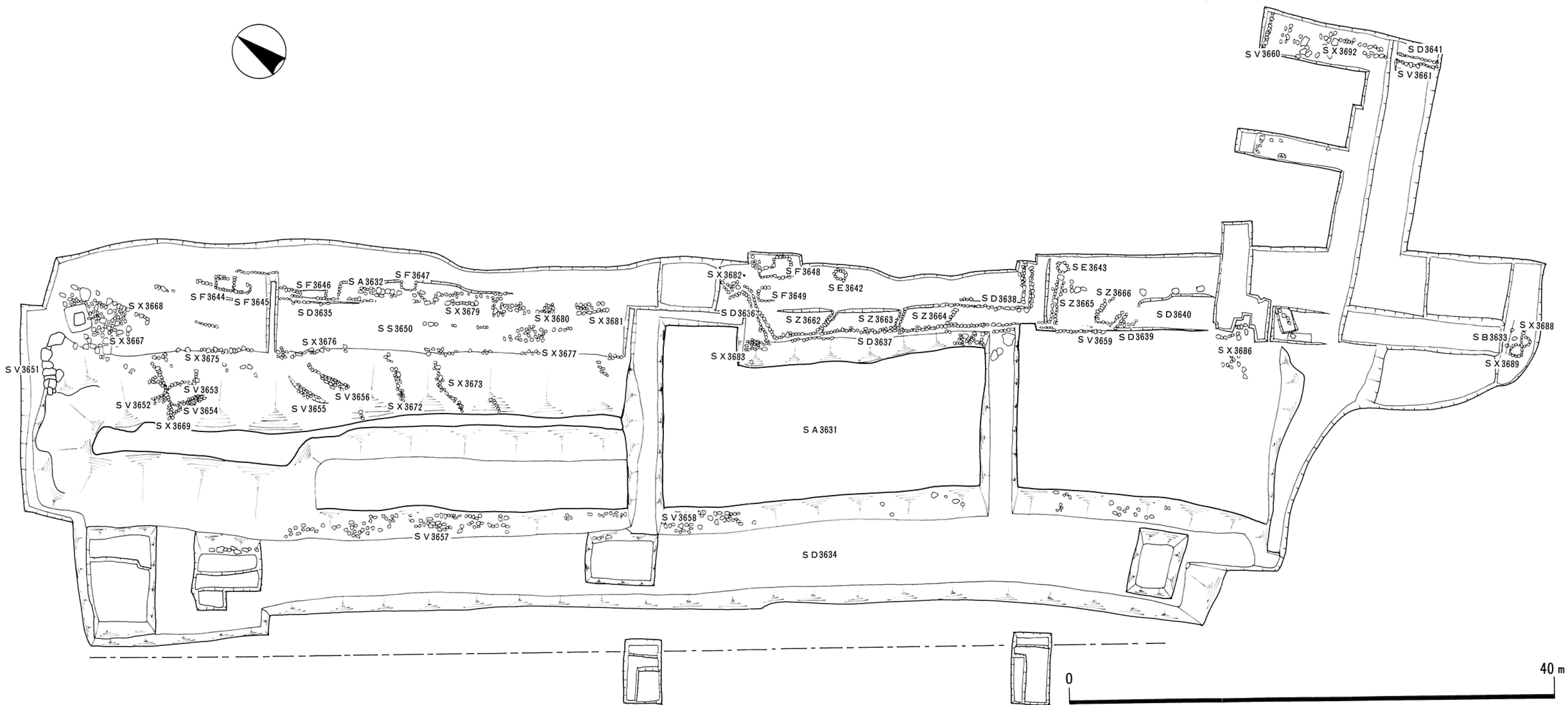


全 景 (東から)

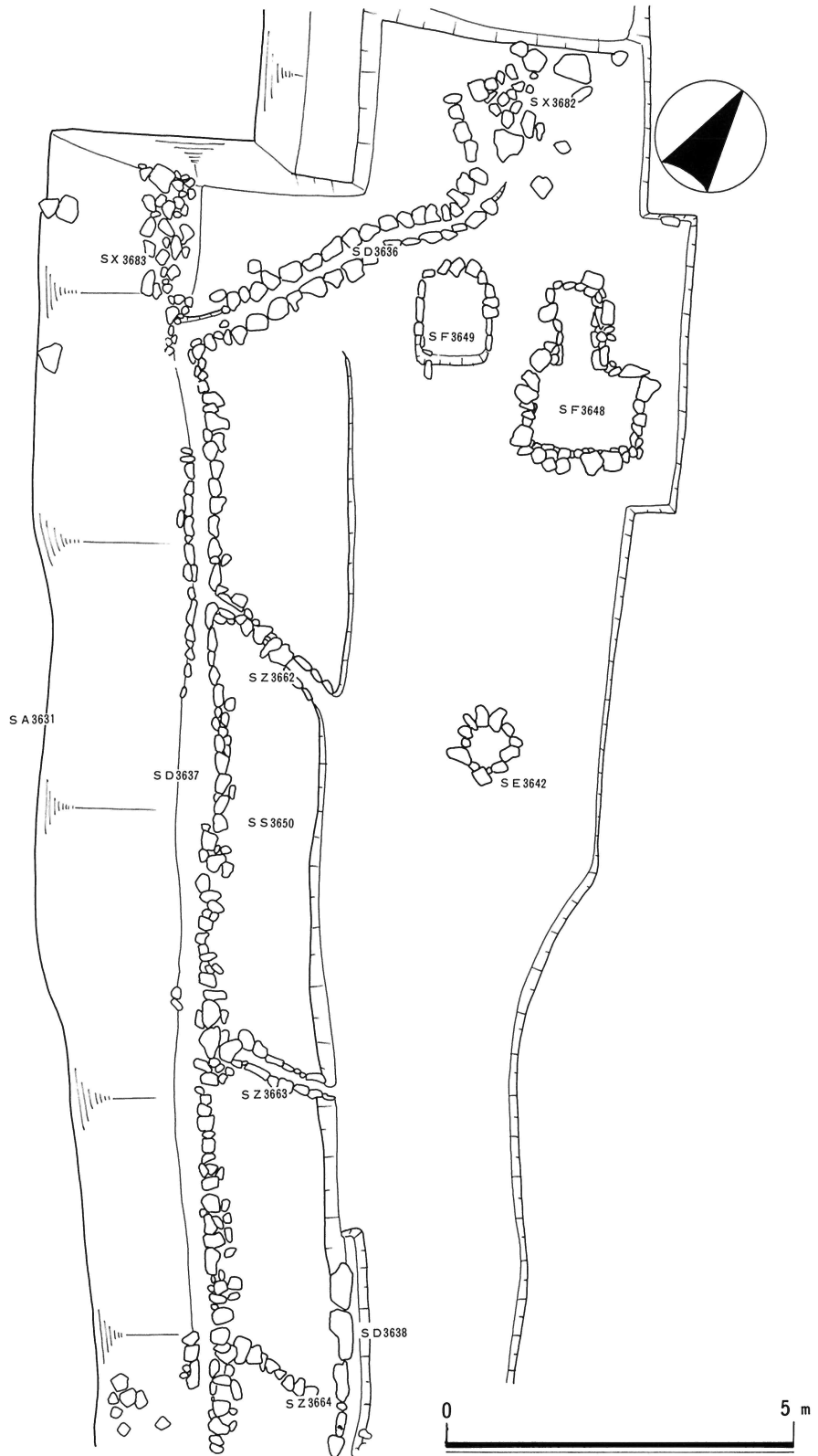


全 景 (北から)





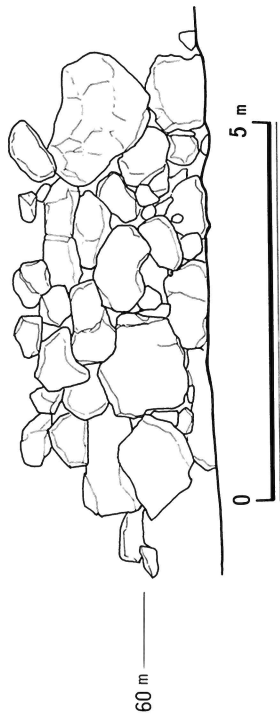




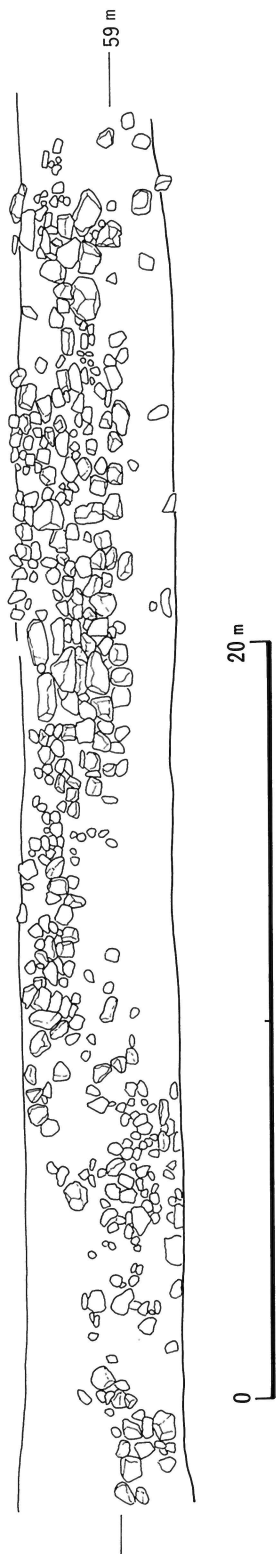
土壘内部の石垣 S V 3652~54・S X 3669

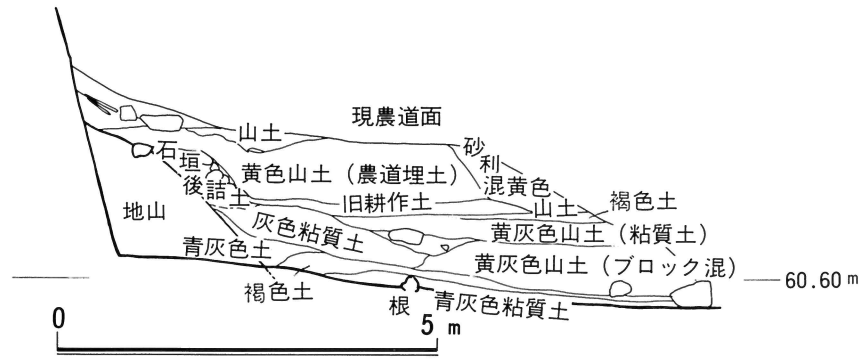


土壘西面の石垣 S V 3651

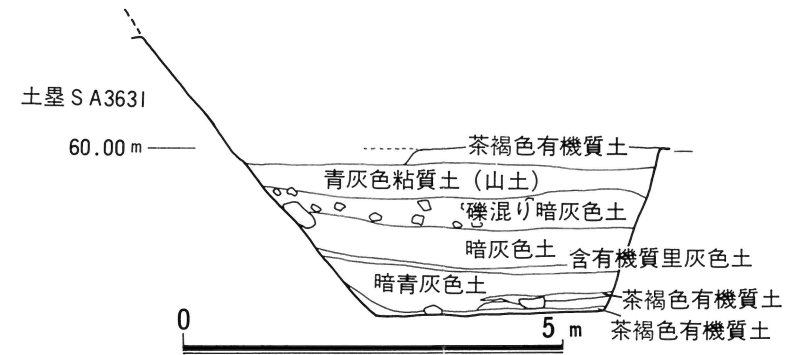


土壘南面の石垣 S V 3657

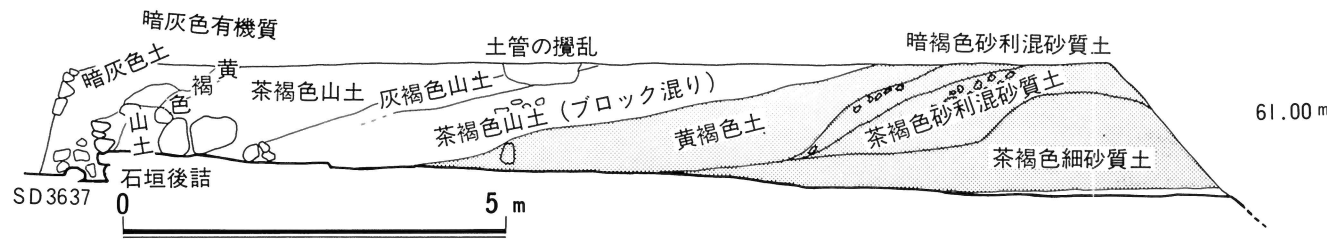




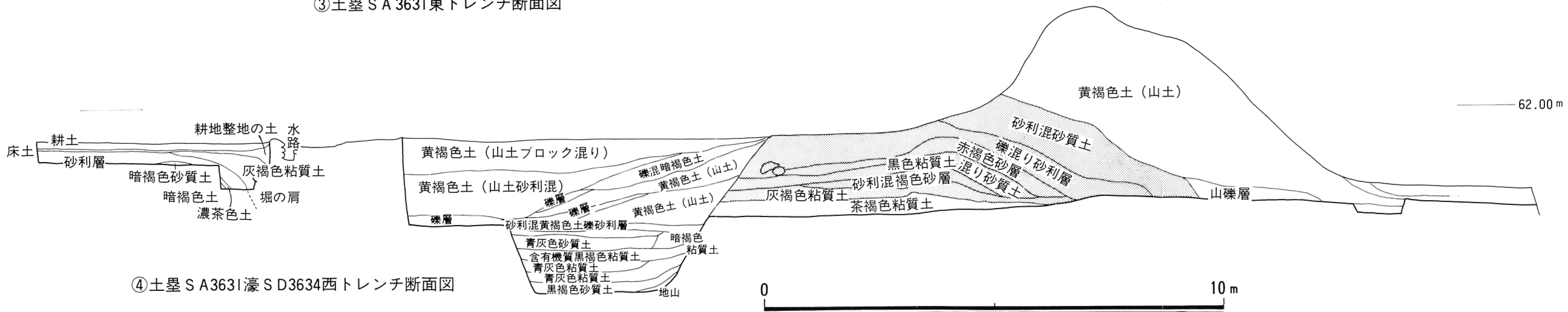
② 濠 S D 3634 東端東西方向土層図



① 濠 S D 3634 東端南北方向土層図



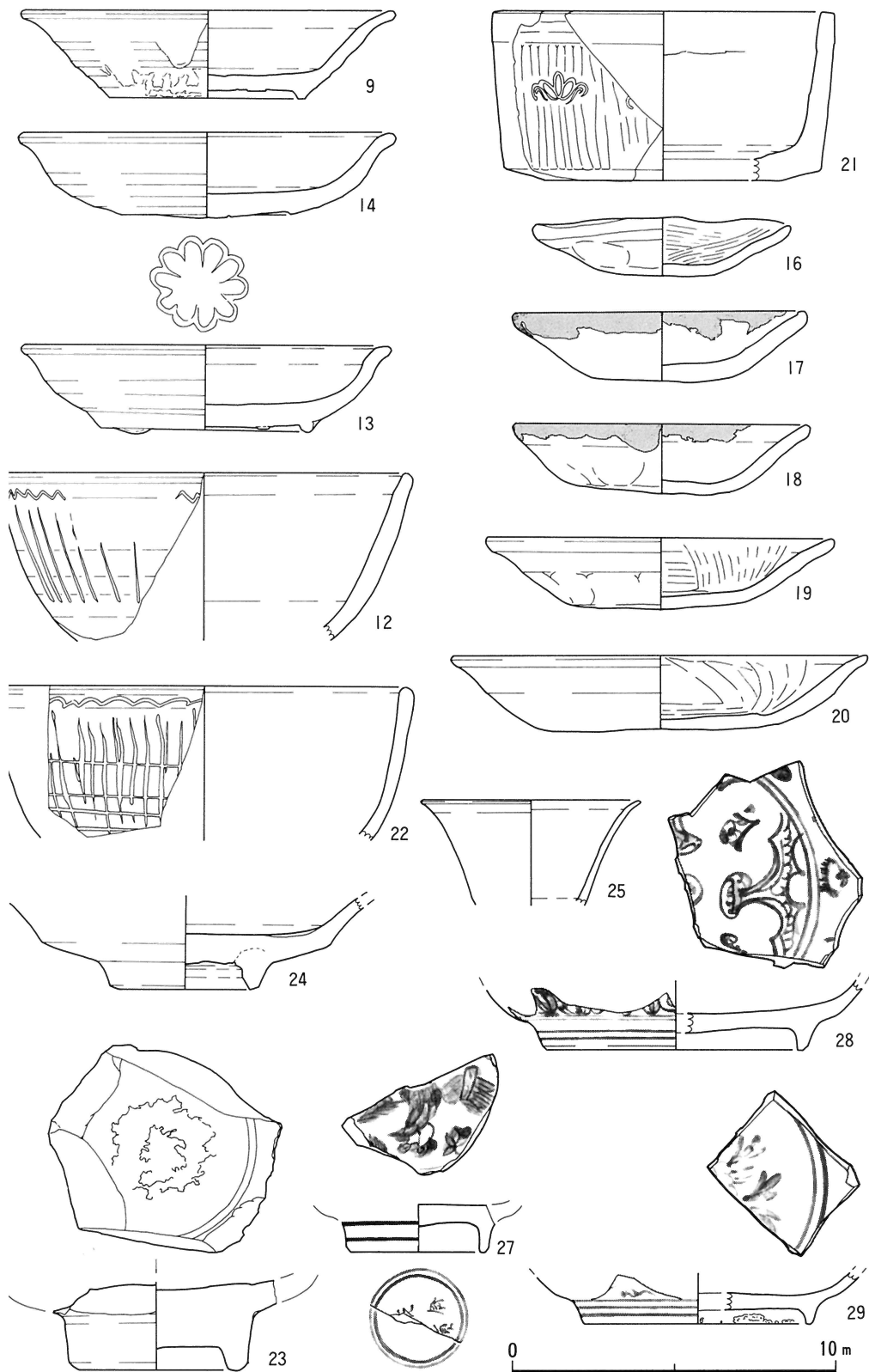
③ 土塁 S A 3631 東トレンチ断面図



④ 土塁 S A 3631 濠 S D 3634 西トレンチ断面図

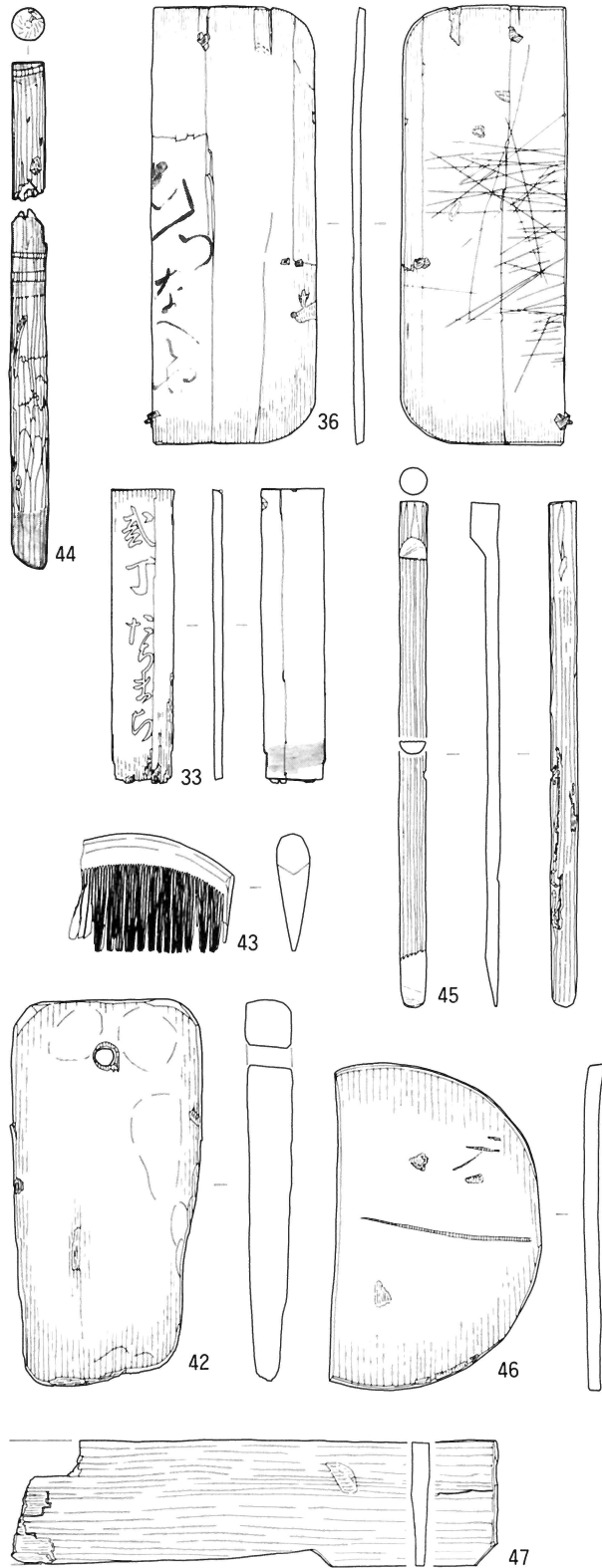
第6図

第61・62次調査・遺物(1)

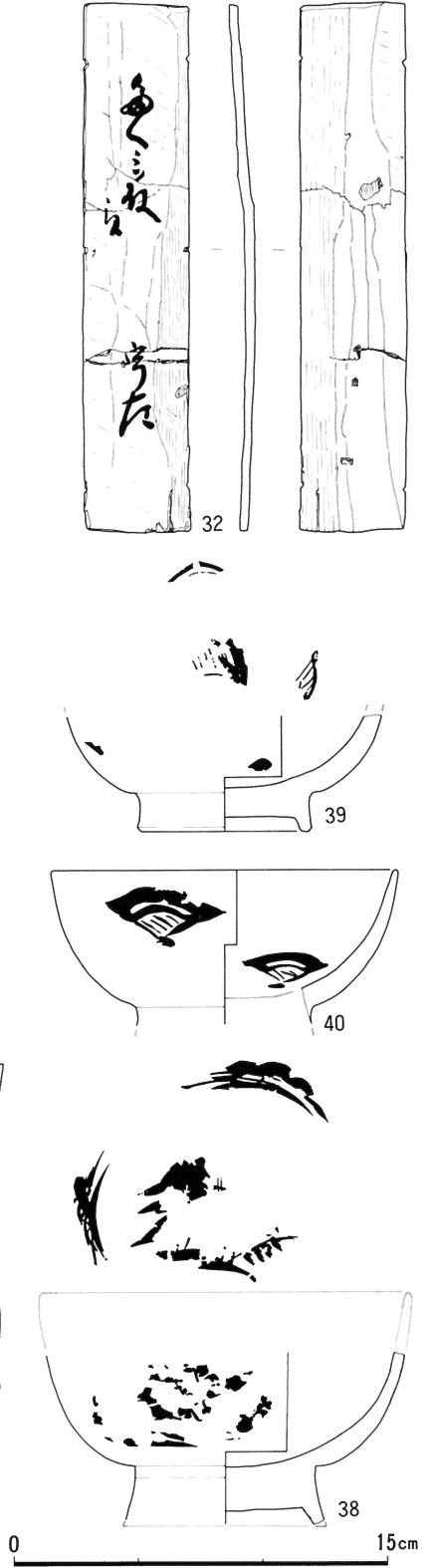


9 黄瀬戸皿, 12 灰釉碗, 13・14 同皿, 16~20 土師質皿, 21 瓦質香炉, 22・23 青磁碗, 24 青白磁皿, 25 白磁坏, 27 染付碗, 28・29 同皿

第7図



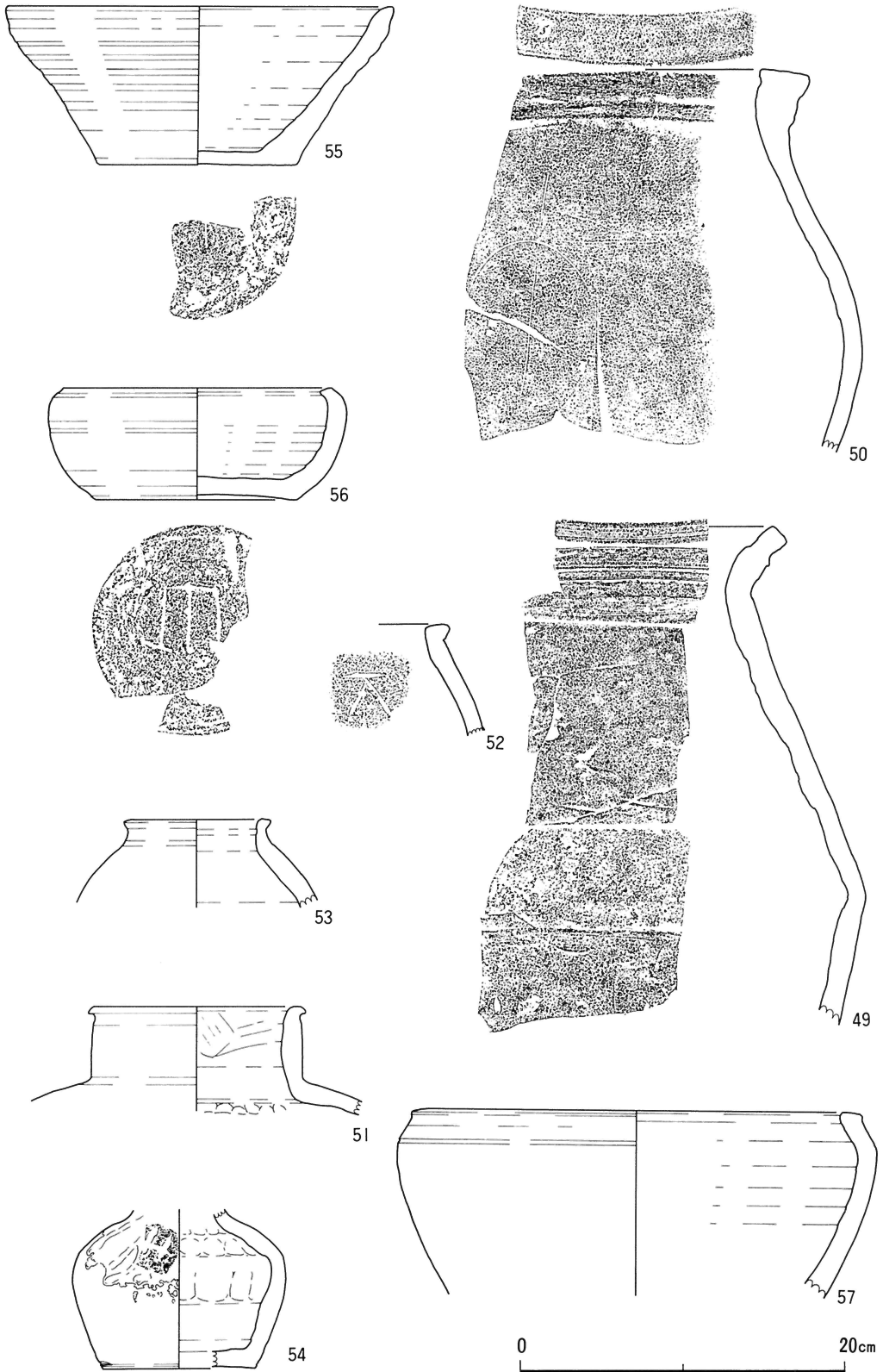
第61・62次調査・遺物(2)



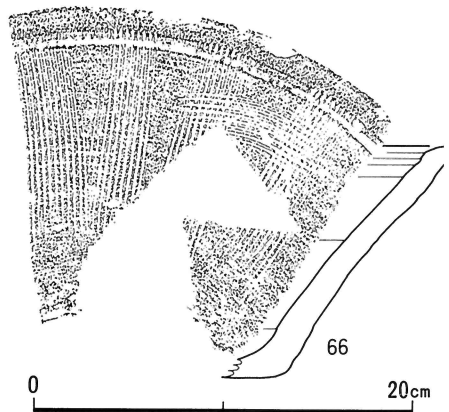
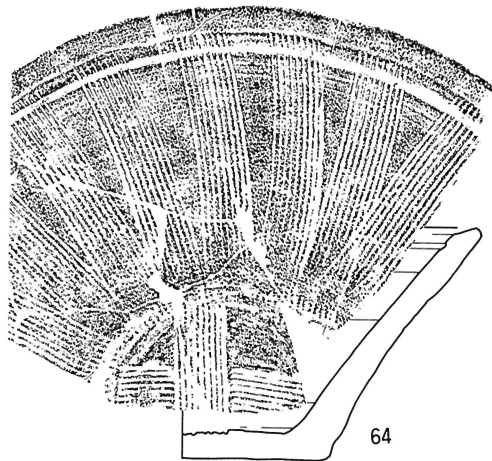
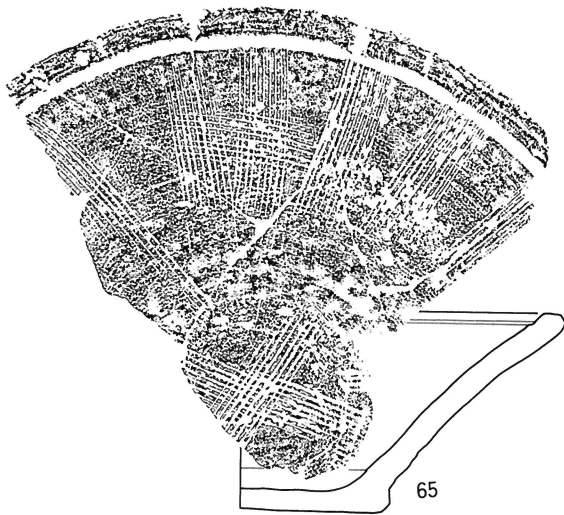
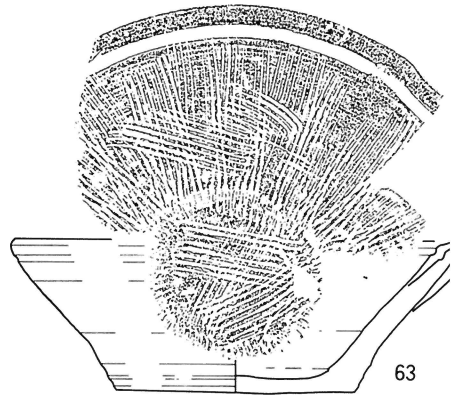
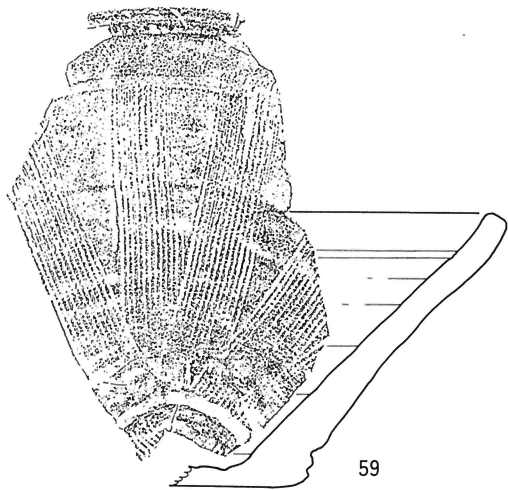
32 付札, 33 墨書木製品, 36 折敷, 38~40 黒漆碗, 42 下駄, 43 櫛, 44・45 加工木製品, 46 曲物,

第8図

第61・62次調査・遺物(3)



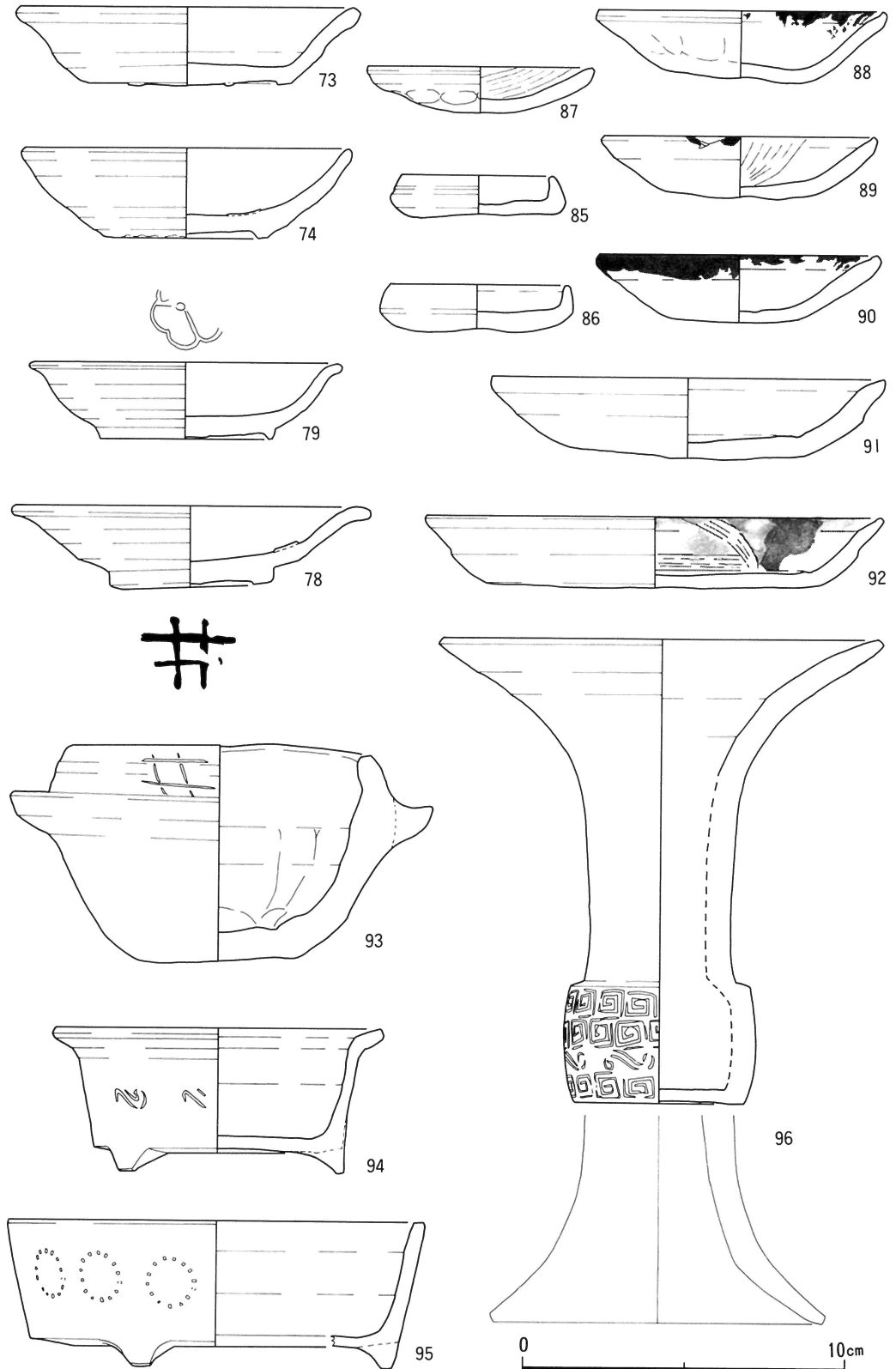
49・50 越前焼甕, 51~54 同壺, 55~57 同鉢,



0 20cm

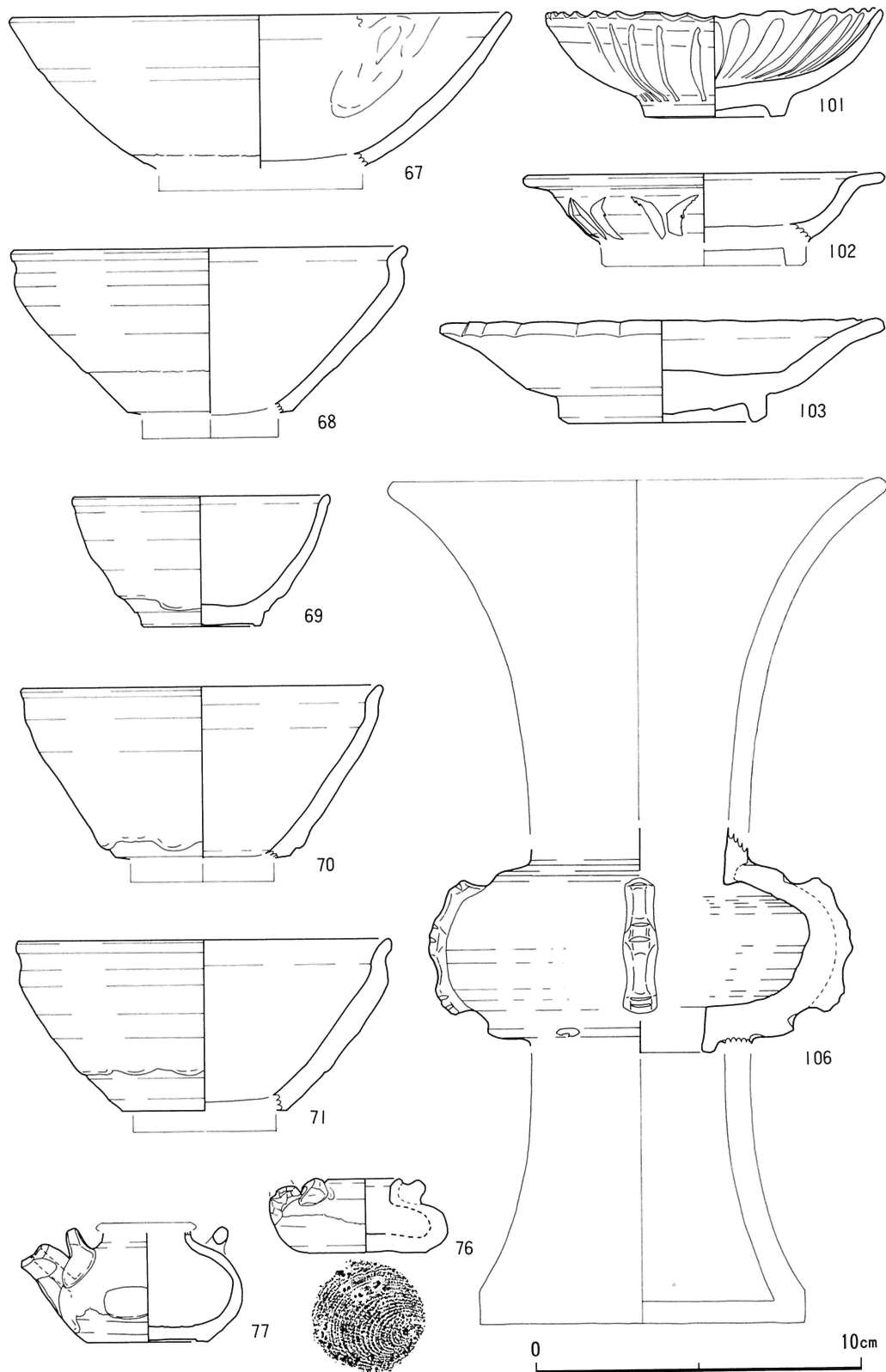
第10図

第61・62次調査・遺物(5)

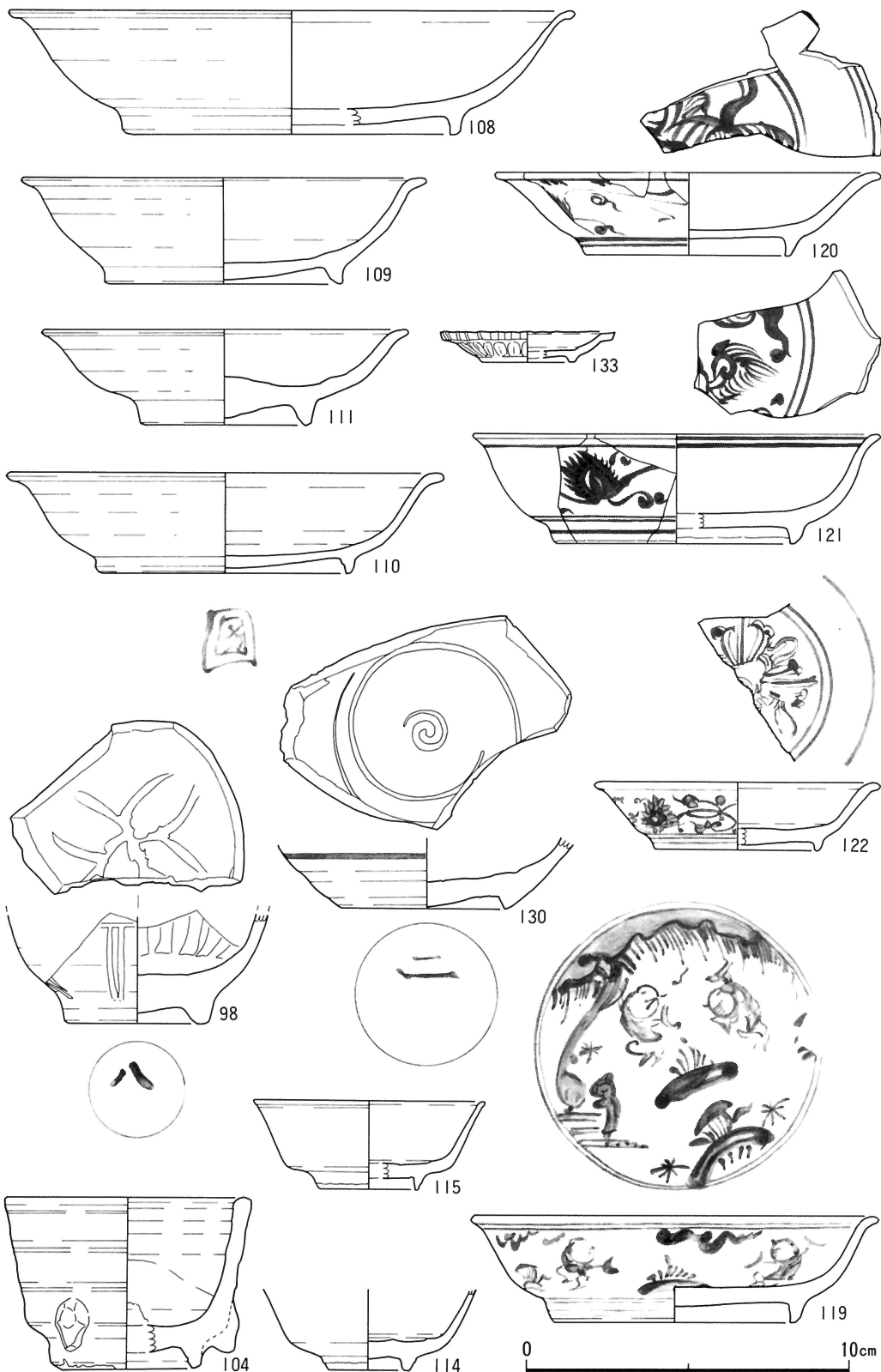


73・74 鉄釉皿, 78・79 灰釉皿, 85~92 土師質皿, 93 同土釜, 94・95 瓦質香炉, 96 同華瓶

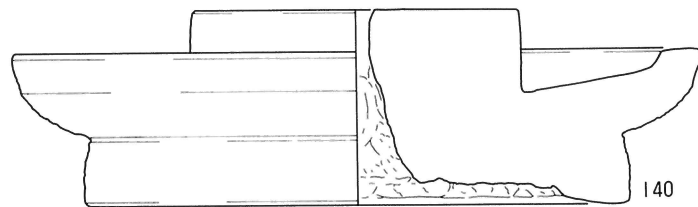
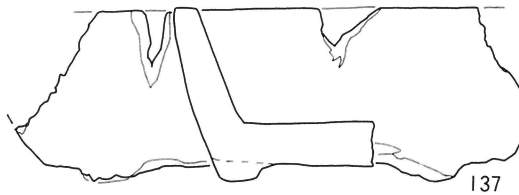
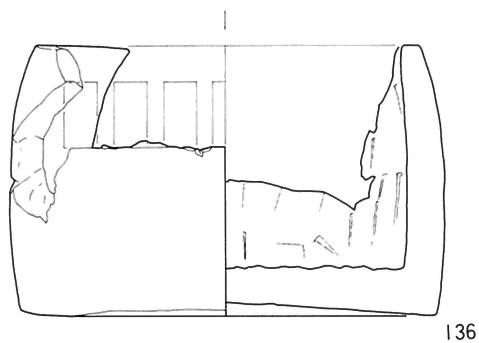
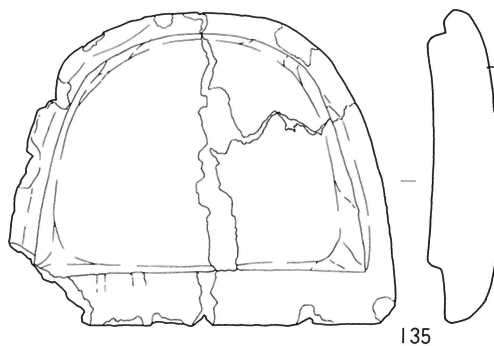
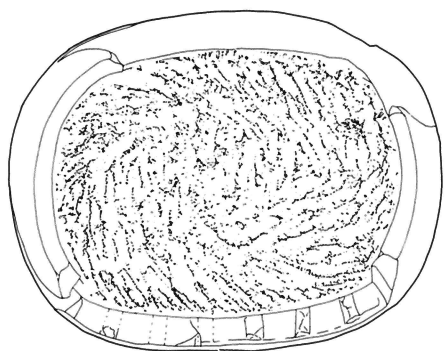
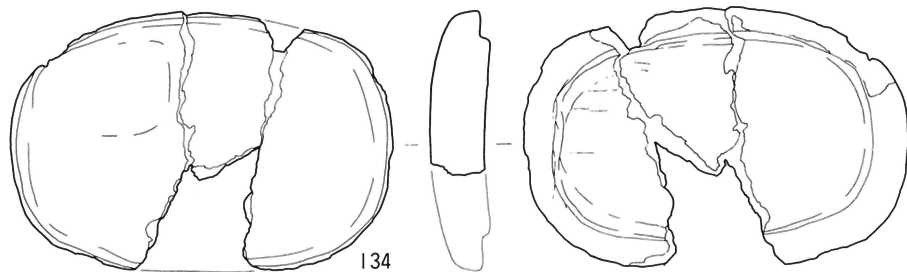




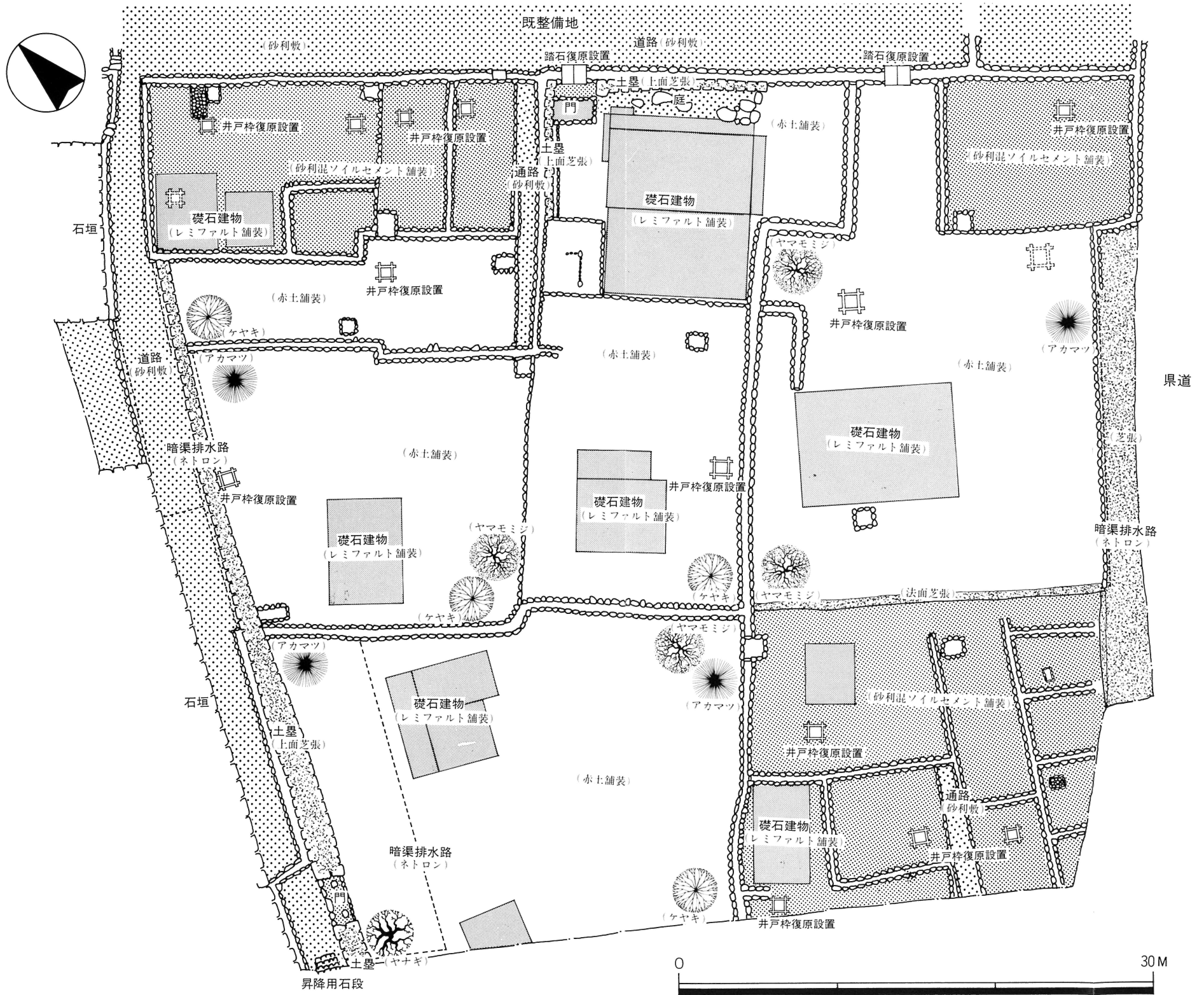
67・68 黄瀬戸碗, 69~71 鉄釉碗, 76・77 同水滴, 101~103 青磁皿, 106 同花瓶

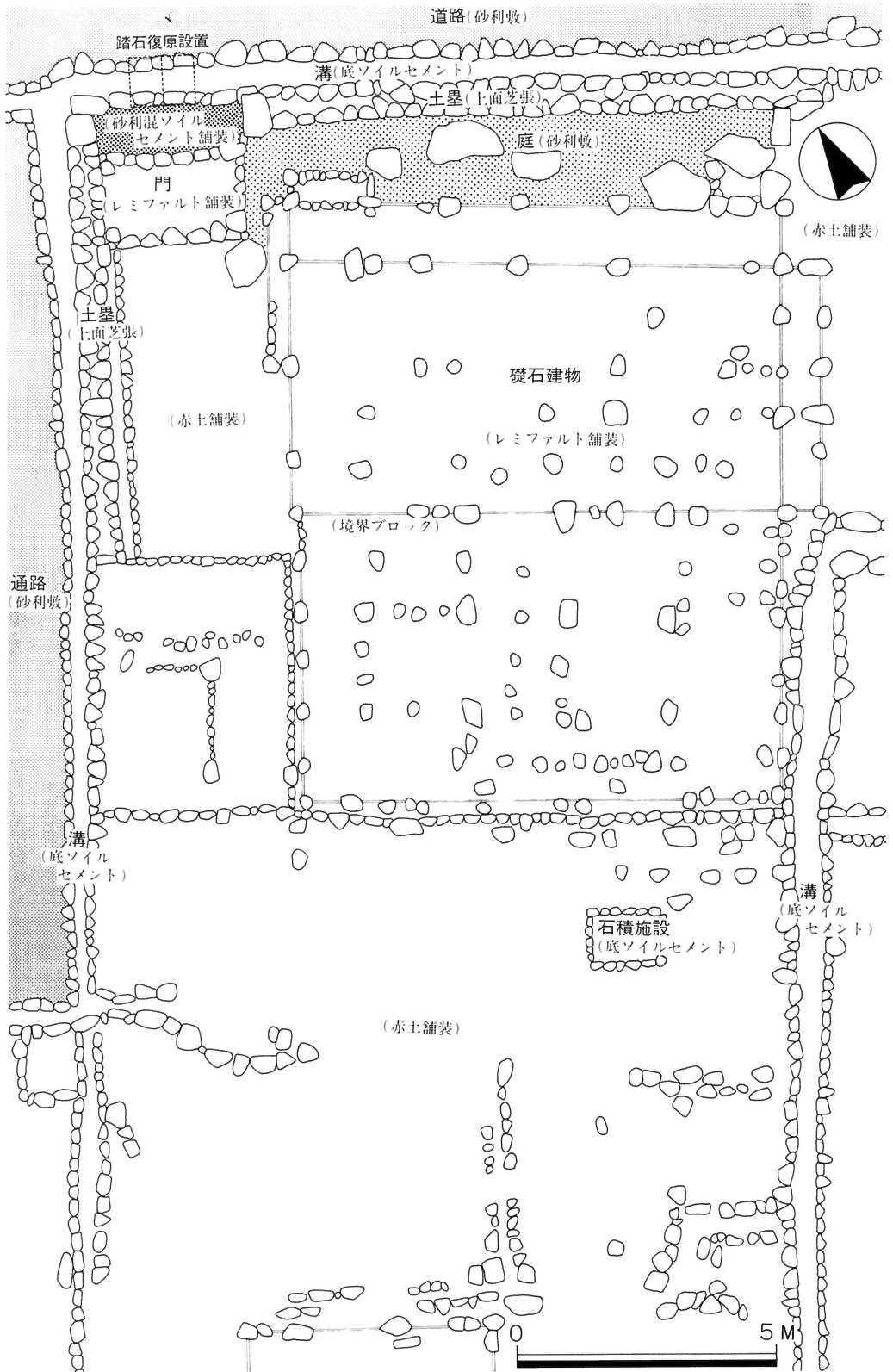


98 青磁碗, 104 同香炉, 108~111 白磁皿, 114・115 同坏, 119~122・130 染付皿, 133 交趾皿



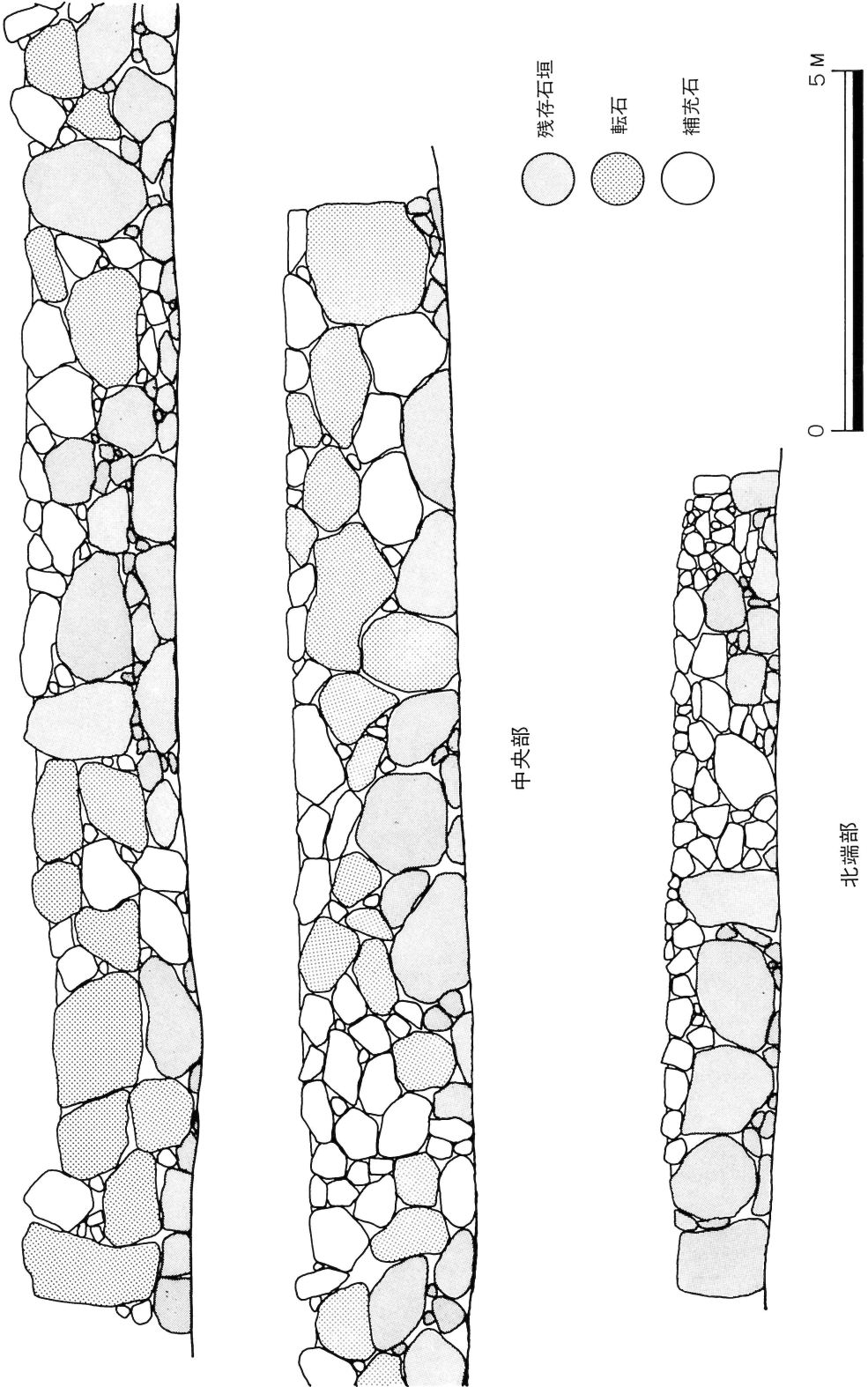
134・135 バンドコ(蓋), 136 バンドコ(身), 137 石製盤, 140 茶臼

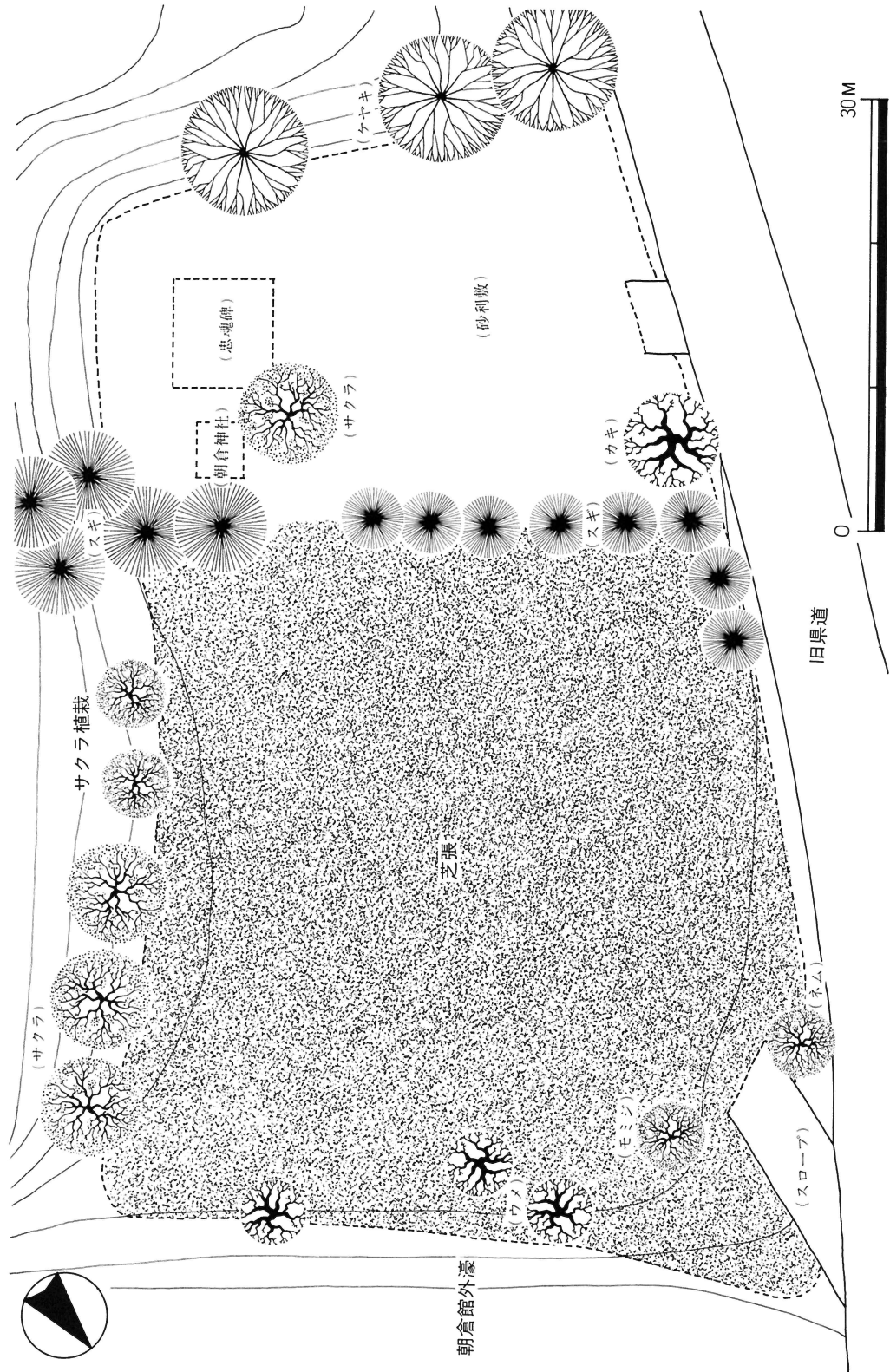




第16図

第51・52次調査区整備工・石垣立面区





---

---

特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 XX

— 昭和63年度発掘調査整備事業概報 —

平成元年3月31日

編集発行 福井県立朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社

---

---

無断転載を禁ず